

「依存する親子」はどこにむかうのか

パネルディスカッション

パネリスト(敬称略・順不同)

マークス 寿子 秀明大学教授

橋爪 大三郎 東京工業大学教授

山田 昌弘 東京学芸大学助教授

コーディネーター

宮崎 緑 千葉商科大学助教授

宮崎 それではただいまよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。

はじめにパネリストの皆様をご紹介申し上げます。まず、皆様から向かって一番右、先ほど基調講演をいただきました東京学芸大学助教授の山田昌弘先生でございます(拍手)。

そのお隣は秀明大学教授のマークス寿子先生でございます(拍手)。マークス先生は1971年ロンドン大学LSE 研究員、その後エセックス大学現代日本研究所日本語コース主任を経て、現在は秀明大学国際協力学部の教授を務めていらっしゃいます。『大人の国イギリスと子どもの国日本』『ゆとりの国イギリスと成金の国日本』など多数の著書がございます。

そしてそのお隣でございます。東京工業大学教授の橋爪大三郎先生でございます(拍手)。橋爪先生はフリーでの執筆活動の後、1989年に東京工業大学助教授になられました。現在は東京工業大学大学院社会理工学研究科教授を務めていらっしゃいます。性・言語・権力を三つの説明原理とする「言語派社会学」の樹立を目指して執筆活動を続けていらっしゃいます。専攻分野は社会学で、『言語ゲームと社会理論』『言語派社会学の原理』などたくさんのご著書がございます。

コーディネーターは引き続き、私、宮崎が務めさせていただきます。よろしく申し上げます(拍手)。

本日は本当にたくさんの方々がお越しくださいました。この会場に入りきれないで、外のモニターでご覧になっている方もいらっしゃるということでございます。いかにこのテーマに関心が高いのかを物語っている感じがいたします。

このように眺めさせていただきますと、ちょうど山田先生のお話に出てまいりましたパラサイト・シングルにパラサイトをさせてあげている親御さん世代の女性が多いような気がするのですが(笑い)。ここで会場にお集まりの方、どのような方が多いのか、お手をお挙げていただけますでしょうか。

パラサイト・シングルとは、「学卒後も親に基本的な生活基盤を依存し、リッチな生活を営む未婚者のことである」といたします。そのようなお嬢さまやお坊ちゃまと一緒に暮らしていらっしゃる方、お手を挙げていただいてよろしいですか。随分いらっしゃいますね。

経済的に自立しているが、二世帯で一緒に住んでいらっしゃるという方はどれぐらいいらっしゃいますか。

お子様とは別々に暮らしていらっしゃる方はどれぐらいいらっしゃいますか。

先生方、このようなバランスでございます。まずこのバランスをどう見るのか、山田先

生に一言お伺いして、他のパネリストの先生方にご発言いただこうと思います。会場の様子はいかがでしょうか。

山田 やはり東京近辺ということで、パラサイト・シングルにかかわりのある人が多い気がいたします。

宮崎 これからご発言に一層力が入りそうな感じがいたします。それでは先ほどの基調講演に対するコメントと、それからご自身のそれぞれのお立場でこのテーマについてどのようなご意見を持っていらっしゃるのか、キー・ノート・スピーチとして最初の問題提起をしていただきたいと存じます。それではマークス先生からお願い申し上げます。

豊かな生活と子育ての関係

マークス 皆さん、こんにちは。マークスです。大変関心のあるトピックのようで大勢の方にお集まりいただきましたね。今日は「ああ、そのようなことだったのか」と思ってお帰りになれる発言ができればいいと思っております。実は先ほどの山田先生の基調講演の間、会場の隅に座って聞いておまして、「ああ、私は損したなあ」とつくづく思っておりました。

私が育ちました30年、40年前は、まだ、一生懸命勉強し努力し、できることなら親を養ってやらなければいけない、と教え込まれて育ってきた時代でございます。私がイギリスに渡ったのは1970年代でございます。日本がこのパラサイトなどということができるようになった80年代を私はイギリスで過ごしております。イギリスは、経済的にはかつてないほど好況なのですが、今に至るまで「子どもは独立するものである」、「親はいつまでも食わせてはならない」という考え方が一般的な社会でございます。のんびりと親に養われていい生活をするなどできないのが当たり前でございます。それで私はパラサイトと縁がなく、虫下しが大変よく効き過ぎてしまいました(笑い)。そのような世代に属している感じがいたします。

山田先生がおっしゃいましたが、「目の前の楽な生活」と「今はつらいが努力すれば夢と希望が現実になるかもしれない生活」のどちらを選択するのか、それは確かにはっきりしているのではないのでしょうか。

そこで、私は二つほど考えました。まず、生活水準を「実際計算できるもの」、「見ることが出来るもの」として、つまり今の日本が生活水準を「もの」として考えていることに問題があります。これはパラサイトの人たちだけの問題ではありませんで、多くの方たちが「豊かな生活」というときに必ず「もの」で考えるのです。「何がある、これがある、あれがある、だからいいんだ」、そういった考え方が問題ではないのでしょうか。

それからもう一つは子育てに対する考え方でございます。少子化の原因がパラサイトかどうかは後で問題になるかもしれませんが、多少私には異論があります。理由の第一はかつての日本政府の「少なく産んでたっぷり手を掛けよう」という方針でございます。戦前から戦後のもののない貧しい時代であった1950年代まで、避妊ができず子どもが多いことは政府にとって非常に負担でした。今では考えられません。「ぬけぬけと少子化が心配だなん

て政治家がよく言うね。つい30年前、40年前まで子どもが多いのは困るから子どもを産まないようにしてくれと政府が頼んだんじゃないか。その時のこと、どうなったんだ」と言いたくもなります。1950年代から60年代の日本の政府の方針は「子どもが多すぎて困る、子どもを少なくしなければいけない、少なく産んでたっぷり手を掛けよう」というものでした。

それが逆に今度は行き過ぎてしまって、少なく産んでたっぷり手を掛けるのではなく、たっぷり掛けるためにはじめから生まないのです。つまり逆に感じた感じがいたします。その他にもいろいろ関連して、今の状況が生まれているのです。子どもに手間を掛けることは、本来は先ほどのようなことではありません。「じゅうぶんに食べさせる」、「病気になったときにお医者さんに連れていく」ことができるように、つまり「非常に基本的なことにお金がかげられないと困るから、子どもをあまり多く産まないでおこう」という時代から、全く逆になってしまいました。豊かな生活という理想を作ってしまう、「その通りにしなければならぬから子どもを少なく産んでおこう」と考えているのが現況だと思えます。

そこで、例えば欧米の国々の子育てや教育が、どのようなものであるのかも一度考える必要があるのではないのでしょうか。今日本で「豊かな生活」と思われているものが本当に豊かなことなのか、考えていく必要があるのではないのでしょうか。「テレビを何台、自動車を何台、あるいはどのようなものを買ったか」ということではない、「もの」があることが豊かさのすべてではない、と考えることが一つ。

それから、「子どもを産み育てることが自分のことだけではなく、社会全体、ひいては国全体の将来を考えることになるのではないか」と考えることがもう一つ。私にとって子育ては、次の世代を育てる、あるいは次の次の世代を育てることです。日本では、それを置き去りにしているのではないのでしょうか。そこを今一番考えなければならぬと私は思っています。

そのようなことを比較的きちんとやってきた国々、いわばプロテスタントの国、ピューリタンに近い国、北欧やイギリスなどには、「子どもを育てることは、決してものを与えることではない」という考え方があります。それぞれの国が、お金を持つことからくる危険やものを持つ危険を知っていると思えます。

先ほど山田先生もおっしゃった通り、子育ても教育もお金がないほうがやりやすいのです。夢を見ている子どもたちを励まして勉強させるにも、何か立派なことをさせるにも、お金がないと楽なのです。何もかもあると確かにやれませんが、それが分かっていたら「人為的にものを与えない、お金を望む通りに使わせない」と当然考えられるべきことです。イギリスの家庭でも、学校でも、子どもにお金を思い通りに使わせないようにしております。寄宿学校や寮生活はその典型です。寮そのものには親がお金を出しますが、お金持ちの子でも貧しい子でも、寮の中の子どもたちの生活は決して豊かではありません。お金持ちの子も貧しい子も同じものを食べ、少々ぬるいシャワーに入ります。部屋も暖房があまり効いていないと子どもたちは文句を言いますが、そのような中で育っていくのです。そして「大人になったら自分で自分のやりたいようにやろう」と思うことが夢や希望になっていくのです。

もう一つ考えていることがございます。日本の中では「豊かだ、貧しい、夢がない、希望がない」と言っておりますが、実際に日本という枠をはずして世界を見ればさまざまな夢が

出てくるはずですよ。「世界のためにこのようなことをしよう」、「よその貧しい国の人たちのためにこのようなことをしよう」、あるいは「紛争が起こっている地域でこのようなことをやろう」など、さまざまな夢が子どもたちに与えられるのです。そのようなことを与えないで「今の日本では閉塞状態で、夢も持てないほど豊かだ」とは、何となくおこがましく、少し近視眼的ではないでしょうか。自分のうちだけを見ているのではないのでしょうか。せつかく21世紀を称してグローバリゼーション、国際化の時代、世界の時代とするのであれば、世界へ目を向けましょう。日本の中では冷暖房もあり、いい食事食べられるかもしれませんが、「国外でいい仕事ができるように、世界中どこへ行っても耐えられるように、つらくても日本の中でも少し厳しい生活をしよう」と考える教育や子育てが出てきてほしいと私は思っております。

私だけが一人でかなり話しましたが、それで安心した気持ちになってしまいますといけませんので、この辺りでやめさせていただきます。また後でぜひお話しをしたいと思えます。

宮崎 ありがとうございます。ほとばしる情熱で話していただきました。また後ほど伺いたいと存じます。では橋爪先生、お願い申し上げます。

なぜこの時代にパラサイト・シングルは生まれたのか

橋爪 橋爪です。山田さんと同じ社会学が専門で、山田さんは実は学生時代から知っています。そのような縁もあって今日は楽しみにしてきましたが、今日のテーマはなかなか話づらくて、実は私は先ほどから困っています(笑)。

いくつか理由があります。

私の仕事は、世の中の間違った制度や困ったことを見つけて批判をする、敵を見つけてやっつけることなんです。しかし困ったことに、パラサイト・シングルは、批判をしようと思うのですが、同時に気の毒な気もしてしまい、どのようにこの問題を語ったらいいか態度が取りにくいのです。これが一つの理由です。

それからもう一つ、あまりひとごとでないということです。親戚を見渡しても、近い親戚に限って10人のうち、パラサイト・シングルが5人いて、打率5割でした(笑)。この辺りが平均的なのかもしれません。一人一人の事情はよく分かるのですが、10人に5人という割合をどのように考えたらいいのか、とても難しいと思えます。

更にひとごとでないのは、先ほど宮崎さんが「執筆活動を続けてのち89年から現在の職場で」と紹介されたので、聞こえはいいのですが、単身未婚の人間として親元にて執筆活動を続けていた。パラサイト・シングルと言えなくもない。

ただ寄生していたのか微妙なところがありました。弁護のために言えば、学費は出してもらっていましたが当時の学費は年間に1万円で微々たるもので、それ以外は自弁し、また家事はうんとやったのです(笑)。そこでなかなかうまく客観化して話せないという面があります。

それではいくつかのことをお話しします。

私は山田さんのお仕事はなかなかいいところに目を付けられたと感心して、特

に「パラサイト・シングル」という名前が良かったと思います。名前はとても大事です。ある現象があったときに、みながうすうす気づいていても、その現象に名前がつかないと考えられないものなのです。

似たような事例として「セクハラ」がありました。そういう現象は昔からあったのですが、セクハラという名前ができた途端に職場の空気が一変した。今までお茶を出してもらっていたが、果たしてこのまま女子社員に頼んでいいものだろうか、などと悩まなければならなくなった。

セクハラにもいろいろあったのですが、パラサイト・シングルも同じです。先ほどの親戚のパラサイト・シングルと昨日も電話で話して「明日山田さんと会うよ」と、パラサイト・シングルの話になりました。パラサイト・シングルの人たちは、パラサイト・シングル同士で集まって飲みに行ったりするらしいのですが、そこでも山田さんの本が話題になっている。「図星だよ。困っちゃうよなあ、こんな本が出ちゃって」と、困惑している。「申し開きができない」、「パラサイト・シングルの生態を分析されてしまった」という感触を当人たちは持っているらしいのです。

これだけのインパクトのある名前と分析、また、本を読めば分かりますが、一見無味乾燥に見える統計的なデータの変化の裏にある深い意味、それぞれの家庭でどのようなことが実態として進行しているのか、その辺りを大変うまく書いてあります。これはいい仕事だと思ったのです。

そのうえで考えてみますと、マークス先生も紹介くださったように、パラサイト・シングルは、日本の、それもある時期に、特別に起こったことのようにです。日本以外の国ではあまり起こっていないようですし、日本でも昔はあまりなかったようです。親は明治生まれで祖父母に至っては江戸時代の生まれという、古めの家庭で私は生まれ育ったわけなのですが、その長いファミリーヒストリーの中でもこのパラサイトという現象は全然ない。つい最近に突然起こっていると思います。ですからこの現象を理解するには、歴史的、時代的に、国際的に、比較をする必要があります。そして、これが今後日本で永続していくのかを考えなくてはなりません。

なぜこの時代に、パラサイト・シングルは生まれたのでしょうか。

いろいろな考え方があると思いますが、理由の一つは、サラリーマンが増えたことです。昔は家業があったのです。大多数の人々が農業や商業、つまり「家」で仕事をしていました。「家」で仕事をしていると、その「家」を継がなければならないから、長男はその準備をする。まず当然労働力となって、生産現場でお父さんやお母さんやその他のいろいろな人を手伝いながら、正規のメンバーとして頑張る、上の世代が引退すると自分が責任者となって家業を継ぐようになっていたのです。だから親子の関係は、財産も責任も権限も技術も知識も全部継承する関係であったのです。親に従わなければ、生きていけません。国民の7割から8割がそのようなやり方をしていました。この時期には同居は当たり前ですが、結婚もするし責任も引き継ぐので、パラサイトという現象にならなかったのです。これがむしろ日本の伝統的な文化であったと思う。

ところがサラリーマンになると、継承すべき財産がなくなってしまいました。知識も技術も親から学べないのです。家制度では女性は嫁ぎ先の親と同居してお嫁さんをやるのですが、その家制度も「自由にやりなさい」という優しい親御さんばかりになってしまって、

核家族になったのです。パラサイト・シングルは核家族という考え方でできていますから、家や古い観念に反対した世代の人々の作った家庭だと思っています。そうすると、責任も何も課すことができません。詰まるところ、サラリーマン家庭が子どもにできることは、教育と、本来のしつけなのです。先ほどから問題になっているように「してあげる」という考え方になって、自立を促す方向にならなかったのです。これは「意図せざる結果」という言い方があてはまるのですが、「だれもそのようなつもりでなかったのに、気が付いてみたらそうってしまった」という偶発的な現象だと思っています。

では、どうしたらいいのでしょうか。私の職場は東京工業大学です。20歳前後の学生が大勢います。いわばパラサイト候補生です。これから育ち方によっては皆さんパラサイトになっていくのです。今30代の男性の未婚率は5割以上です。40代でもけっこう独身の人がいるのです。昔のような考え方のままでは、配偶者が見つかりません。そこで男子学生に最近の結婚統計を見せて、「君はずっと結婚できないかもしれないよ」と言うたびびっくりします。その辺りから少しずつ解きほぐしていくのです。パラサイトにならない予備知識を私は伝えようと思っているのです。

私は毎年学生を中国に連れていきます。いろいろなご縁で中国に知り合いがいますので、何週間か、30人、40人をまとめて中国に送り込んで生活させてしまう。そうすると彼らにどのような変化が起こるでしょうか。そのパラサイト候補生たちは、まずショックを受けます。中国は最近とても豊かになってきましたが、それでも日本と比べれば物質的に貧しいところもあります。大体日本の1960年代の豊かさですが、50年代ぐらいの地域もあるかもしれません。どこも建設工事で、国じゅう大変な熱気でむんむんしているのです。

そして、ショックを受けた後、次に彼らはどのように感じるのでしょうか。「物質的豊かさはない、みな真剣に生きている、真剣に生きざるを得ないのかもしれない、しかし、一人一人が生き生きしている」と感じるのです。そして「負けた」と思うといえます。「自分は恵まれてこのようにいろいろ自由になるものがある、それからのんびりだらしなくそうした条件に安住していて、同級生もみなそうだし、それが当たり前だと思っていた。しかし、中国に行ってみるとそうでないことがはじめて分かった」。現地の大学生と話をして「日常生活を比べてみると、自分のほうが甘い」と言うのです。次に「負けた」という印象を持つのです。

そのあと、次にどのように彼らが考えるのでしょうか。「自分にはチャンスがある。自分は大学にも入学した、恵まれている、実はいろいろな選択肢があったのだ。今まで親に言われ何となく大学に入学したが、これからは自分で歩いて生きていかなければいけない」と。だれもがこう理想的に考えてくれるわけではないのですが、このように考え方が変化し、実際にライフコースが変わってしまう学生が何人もいます。これもパラサイトの治療法のヒントになるのでしょうか。

でもここにも問題があります。中国に行くお金はだれが出すのでしょうか(笑い)。よく聞いてみると、親が出している場合も結構ありました。最近の親は優しく、「自立しなくちゃいけないからおまえ、橋爪先生の中国短期留学でも行っておいで」と勧めたりするようなのです。ここに非常に難しい問題があるのですが、これぐらいにしておきましょう。

最大の問題は若者の心への影響

宮崎 ありがとうございます。大変ユーモアのあるお話でございました(笑い)。今、先生方に一通りお話をいただきました。たくさん問題が含まれているのでどこから始めようかと私も迷うのですが、よく伺いますと、若干このパラサイト・シングルという現象に対してスタンスが異なっている気がするのです。

山田先生はこの言葉の生みの親でいらっしゃるから、今抱えている懸案事項としてパラサイト・シングルという状況を眺めていらっしゃる。それに対して橋爪先生は「時代の要請としてある程度容認するところもあるかもしれない」、このようなお立場ではないかと勝手に私は解釈しております。山田先生のご議論は大変明確に「パラサイト・シングル」という一言で、少子化も未婚化も、そして最近の経済不況に至るまで、すべてが説明できるのですね。

例えば、不況についてはこうです。「親と同居していれば生活の基本的な物資が一通りで済む、つまり親の分と子の世代の分で冷蔵庫は一つでいい、洗濯機も一つでいい、そうすると倍売れるはずが売れない、消費の底冷えの背景にこれがあるのだ」と、非常に見事に説明してくださるのです。

でもこれは経済の原理で説明するからで、地球環境問題がこれだけ懸案事項になっておりますと、地球環境を守るためには冷蔵庫も洗濯機も一つのほうがいいのかもかもしれません。そうすると、この現象は非常に素晴らしいことだという見方もできるかもしれないですね。これをどう評価するのか、マークス先生に伺ってみたいと思うのですが。

マークス 異議申し立てをするようで申し訳ありませんが(笑い)、冷蔵庫と洗濯機は一つで親に洗濯してもらってもいいかもしれませんが、テレビは子どもたちが最近ではみな自分の部屋にも持っているそうです。車も親と子が別々に持っているようですし、それからゲームやコンピューターはみな子どもは子どもで持っているのです。最近の経済不況のすべてを説明できるわけではありません。洗濯機と冷蔵庫は消費が少し低くなったかもしれませんが、しかしその他の、いわば今、政府が率先してやろうとしているIT産業関係の経済はパラサイトが支えているのです。パラサイトがいなくなったら経済はがっかり駄目になるのであれば、パラサイトは残しておいたほうがいいのかもかもしれません。

ですからパラサイトですべて説明できるとは思っておりません。ただ山田先生は大変悲観的な感じがいたしまして、おかしい中に悲しみがあり、非常にいい落語を聞いた後のような(笑い)感じがいたしました。もちろん「パラサイトは、活気をなくすのか」という点からみれば、その通りだと思います。

パラサイトは20代から30代が多いのですが、イギリスのそれと比べて子どもたちだけ見ておりましたが、イギリスの子どもたちは日本の子どもたちよりはるかにワルで悪いこともしますし非行もありますが、元気があります。「くれないのなら自分で取ってやろう」ぐらいの元気がありまして、人がくれるのを黙って待っていません。そういうのがいいか悪いかわかりませんが、日本の戦後の世代もそうであった、そのような活気がありました。今のパラサイトの一番大きな問題は与えられるものを待っているという受け身の姿勢ではないでしょうか。

それから、親も子どもに言われる前に与えてしまいます。もので与えてしまうこともあります。手伝って何かしてあげてしまう、「お皿も洗ってやる」、「料理も作ってやる」、つまり自分でやれなんて言わないところがあって、子どもに対する刺激が親からもありません。子どももそれを受けるだけで、そのことを特別に感謝するのでもないし、してもらってありがとうと言うわけでもありません。してくれないと文句は言うが自分でやろうという力はない、それが経済の問題より大きな問題ではないでしょうか。

宮崎 全くその通り、経済の問題でなく違う指標で計るべきだと思います。悲観的にとらえるのでしょうか肯定的にとらえるのでしょうか。また、この現象を読んでいくときに、マークス先生はITを牽引していくのはパラサイト世代なのだとおっしゃいました。これは希望の星ですよ。まず最初のスタンスとして、この現象をどうとらえたいのでしょうか。

橋爪先生、いかがでございますか。

橋爪 私の考えは山田先生に近いのです。親も子もそうするつもりではなかったのにそうになってしまって、とりあえず今はいいのだがこの先困るだろう、あるいは今もう困りはじめている現象ではないか、と思っています。

ITとは、iモードやモバイルなどのように、おもちゃみたいなものです。このガジェットのたぐいは日本が一番うまいのです。私はこの夏まで1年間アメリカで生活していました。アメリカの大学生も少しずつ携帯電話を持つようになったのですが、その携帯電話は武骨で重たくて、かわいげが全然ないのです。ところが日本ではほぼ全員携帯電話を持っています。いろいろな携帯電話がとてもよくできていて、値段も安いのです。このようなものでは日本は先進国です。原宿文化なるものもアメリカではすっかり定着しています。子どもたちはポケモンが、若い女の子たちには厚底のブーツが、今流行しております。というわけで、日本の若者はリッチでファッショナブルだということはまず間違いないのです。

しかし問題はここではないと思うのです。ハイテクの一番大事なところは、理工系大学に進んだ人たちがリスクを覚悟してベンチャービジネスを興して、今までだれも考えなかった新しい原理を応用して製品を作ることです。それには失敗するかもしれないわけだから、リスクの考え方が必要です。また自分の才能を信頼して冒険しなければいけません。それだけの冒険心や野心が日本の学生にあるのでしょうか。私も日ごろ観察しているのですが、どうも物足りないと言わざるを得ません。

だから、携帯性に優れた商品が非常に売れたりする現象はもちろんありますが、生きる意欲においては多少心配だと思っています。親の経済力に頼っていたのでは、親の経済力を超えることはできません。

山田 前に戻していいでしょうか。

宮崎 どうぞ(笑い)。

山田 確かにエコロジーはよく言われるのです。でも、ただエコロジーを考えてしまうと生きていること自体が環境破壊です。私の知り合いの大学の先生に徹底したエコロジストがいます。「家の中には冷蔵庫もない、勉強するから仕方なく電気とパソコンはあるが、他のものは使わない」という人がいるのです。徹底しだすときりが無いと思います。

あと、本の中でパラサイト・シングルがけしからんと書いたことはないのです。すべてがマイナスというわけではないのは確かだと思います。

例えば犯罪にしても、貧困が原因の強盗などの凶悪犯は最近少なくなっていると思います。やはりそれ以上に、マークスさんや橋爪さんが話した通り、若者のやる気や活気を失うマイナス面のほうが大きいと思っています。

横並び意識と家のしつけ

また、パラサイト・シングル現象を考えるうえで横並び意識は重要なことだと思うのです。親の話を聞いてみると横並びなのです。「安全プラス横並びにやりましょう」。戦後日本社会は横並びで安全にうまくいってました。「自分たちの世代でうまくいったから、自分の子どもたちの世代もうまくいくに違いない」と多分親は思っているのでしょう。そこで世代の移り変わりや時代の移り変わりにミスマッチが起こっている気がします。

宮崎 そうすると、パラサイト・シングルの先ほどの歴史的な発生の経緯も、一つにパラサイト傾向が出ると横並びで時代の風を受けているために全体が染まってしまう、そのような社会の特徴にあると指摘できるのでしょうか。

山田 そうです。周りの人が子どもに対してこれだけやってあげると、「自分もやらないと駄目か、愛情がないのではないか」という圧力にさらされてしまいます。日本は世間体や恥の意識が強いのです。嫌だと思っても、もしかしたら子どもをスポイルすると思っても、世間体でやらざるを得なくなってしまうことがあると思います。

マークス 先ほど橋爪先生がネーミングがお上手だというお話をしました。「パラサイト・シングル」という言葉があつては困ると思う人もいますが、「言葉ができたのだからやってもいいのではないか(笑い)、うちの子どももそうさせてやろう」と思う親も出てくるのではないかという気もして、みな安心してしまっているのではないのでしょうか。公認されてしまつて安心してしまっているのではないのでしょうか。

私は今お話を聞いて、これを子どもと親という関係でなく夫婦間でとらえるといろいろな問題が出てくるのではないかと思います。つまりパラサイトされている親たちは、どちらかといいますと「うちの子どもには夢を追わせてやろう」という非常に好意的な見方をしています。なぜでしょうか。「自分はやりたいことができなかった」。お母さんもそうかもしれませんが、お父さんにそのような理由があることに私は大変びっくりしたのです。もし50代から40代のお父さんたちが「自分はやりたいことをやれなくて家族の犠牲になって、会社という恐ろしいところへ勤めて、そこで朝から晩まで働かされた」と考えているとしたら、これは私には大変ショックです。弊害があつたにしても、日本の戦後を支え

経済発展を実現してきたお父さんたちが、自分たちが日本経済をこれだけ立派にしてきた、会社でこんなに働いてきた、誇りを持ってやってきたと私は思っていたのです。ところがこのごろは「自分たちが間違っていたから子どもたちには好きなことをやらせよう」と言っています。何か逆になっている感じがいたします。それに対してお母さんは「お父さんは頼りにならないし、もうどうでもいいから子どもたちと一緒にいよう、娘と一緒にいよう」と思っているのではないのでしょうか。そして母と子が姉妹のようなのです、あるいは家政婦代わりをして息子とくつつくのです。先ほども娘が結婚するならお母さんも一緒にもらってくれという人の話がありましたが、夫婦間がきちんとしてないために子どもとのつながりが異様に強くなっているのではないのでしょうか。そこが欧米の国々とかなり違うところではないかと感じました。

宮崎 やはり、根底に妻をお手伝いとしか思っていない男性の意識があるのでしょうか(笑い)。

マークス 私はそこまで言いませんでしたよ(笑い)。

宮崎 どうぞ、山田先生。

山田 「妻はお手伝い」という一方で、妻のほうは夫を給料運搬人としか思っていないのですよ(笑い)。

宮崎 それが相互に自分を映す鏡になっているのでしょうか。

山田 そうだと思います。

宮崎 橋爪先生、どうぞ。

橋爪 これはなかなか話しにくい話題で、困っています。私はきょうだいの中で下のほうなので、彼らの子育てとその結末をよく観察しておりました。きょうだい聞いていないことを望みますが(笑い)。私自身も子どもを育てる側の立場になって、いろいろ考えて、「自立」が大事だと思いました。「自立」ということを事あるごとに強調し、子どもを育てたほうが良いと思いました。教育改革の仕事にかかわったこともあり、私たち夫婦は相談し、大学がいかにお金がかかるかを早い時期から懇々と説き聞かせ、「大学に行く結果、利益を得るのはおまえ本人だ」、「学費は自弁すべきだ」と子どもに宣言したのです。はじめのうちは「他の日本人はそうではない」と言っていたのですが、親がそろって厳として態度を変えないものですから、次第に考え方が変化していつ、最近学費は自弁すべきだという考え方になってきたように思います。だから「他がどうあれうちはこうやるのだ」という考え方があれば、個別には解決できるのではないかと思います。

宮崎 そこが実はこの現象が日本独自である原因の一つだと思うのです。「みんなで渡

れば怖くない」という社会で、他がどうでも自分の固有の価値体系で生きていくことが許される社会かどうかですね。

橋爪 サラリーマンの家庭でどのように子どもを育てるか、日本にはそのマニュアルがありませんでした。それで、一世代前のお嬢さまやお坊ちゃまがどのように育っていたかと考えたと思うのです。

もし教育の他にしつけがあるとすると、欧米社会では宗教がその基本になります。そしてキリスト教には実に宗派がいっぱいある。カソリック、プロテスタント、ギリシャ正教。そしてプロテスタントの中にもまたいっぱいある。その宗派ごとに教会があり、教会が違えば教えることが少しずつ違うのですから、家庭は横並びになりようがない。そうするとどうしても家ごとにしつけをやらなくてははいけません。これが、大事な常識としてあると思うのです。右へならえの日本社会とはだいぶ違う。

それから、キリスト教の影響をもう一つだけ付け加えます。聖書に書いてあるこの言葉を皆さんご存じでしょう。「宝を地上に蓄えてはいけません。これは「虫が付いたり泥棒が持っていったりしてしまうから、宝は天国に蓄えなさい」という意味で、要するに「もの」に執着してはいけません」といっているのです。アメリカは物質主義だとよくいわれます。しかし実は、「ものは大事だが心はもっと大事だ」と教えています。そこにはしつけの技術がありました。

日本はその辺りが足りないと思うのです。家ごとにしつけをする伝統があれば「うちはこうなんだ」と親も自信を持って言えるのです。しかし今そのようなことを言おうとすると、日本の親は自分の手で創り出さなければいけません。これはなかなか大変なことです。忙しいですからそのようなことしている暇はあまりない。

自立と自由について

宮崎 心の問題は本当にすべての根源の重要な問題だと思うのですが、10年ぐらい前までの日本では心というすぐ女・子どもの理論だと切って捨てられたのです。最近、ようやく皆さん真剣に取り組んでいただけるようになった気がいたします。マークス先生にぜひその辺りを伺いたいのですが、「自立」という言葉が先ほどから頻繁に出ております。これはキーワードだと思いますが、その中身について実際に心の問題から考えた場合、何を意味しているのか解説していただけますでしょうか。

マークス 二つあると思います。一つは経済的な自立です。もちろん該当しない特殊な例もありますが、経済的な自立がなければ心の自立もないのが常識になっております。

普通に一人前になる人間にとって、経済的な自立によってはじめて自由が獲得されるのです。欧米には親掛かりや人に掛かってではなく「経済的に自立していなければ、自由は得られない」という常識があると思います。極端なことを言えば、刑務所では全部食事も食べさせてもらえぬし国から何もかもしてもらえないので、経済的に自立する必要がないのです。その代わりに自由も全然ありません。経済的にどこかへもたれ掛かれれば自分の自由が制限されるのは当たり前のことです。だから自分で自分の人生を生きようと思ったら、

経済的に自立する必要があります。

自由はなぜ必要なのでしょう。自由があってはじめて自分の決断ができ、判断ができるのです。自由があるから、自分がやりたいものを、たとえ親であろうと兄弟であろうと人が何と言おうと、無数の選択肢の中から自分で選べるのです。

ですから夫婦の場合にも、お互いにもたれ掛かるために夫婦になるのではありません。お互いにお互いの自由を楽しみながらしかも選択が一緒にできる人を相手に選ぶことが、二人が自立している基本になるのではないのでしょうか。

宮崎 また「自由」というキーワードが出てまいりました。旧ソ連東欧圏の社会主義諸国が自由化・民主化するまでは強権支配のもとで自由がありませんでした。その支配に抗して一生懸命に文化や芸術を作り出そうとした人が、自由を与えられた瞬間に、何をしていいか分からなくなったという現象がありました。自由は非常に難しいものだと思うのですが、やはり「パラサイト」と呼ばれる方々は自由で豊かで好き勝手に暮らしているつもりでいて、実は本当は自由ではないのかもしれませんが。山田先生、その辺りはいかがでしょうか。

山田 そうですね。マークス先生の定義からすれば自由ではないと思います。経済的に依存していても選択肢が一見あるように見えてしまうのです。買いたいものは買える、行きたいところには行ける、しかし親元から離れる自由がないのです。小手先のものを買う自由だけなのです。刑務所とマークス先生がおっしゃいました。家族という刑務所の中ではテレビも見られます。まさに居心地の良い刑務所の中にいるようなものかもしれません。

宮崎 橋爪先生、自由と自立の問題について、いかがでしょうか。

橋爪 自立は急に達成されるものではなく、準備が要るものだと思います。その辺りは、学校がいけないのではないのでしょうか。家族も連れてアメリカに行きましたので、私の子どもはアメリカの高校に通いました。あちらの学校教育をよく観察してみますと、アメリカの中学校・高校は子どもが大人になることをとても意識して育てているのです。そんなことは当たり前だと思うかもしれませんが、私に言わせると日本の先生たちは「子どもは子どもという別の種族だ」と思っているのです。子どもが犯罪を犯したり、結婚したり、セックスしたり、同棲したりすることを、学生らしくないから「しないもの」と考えているのです。一方アメリカの学校は大人への準備をさせるわけで、高校に行くとお化粧を練習したりするのです。「自分をより魅力的に見せるにはどうしたらいいでしょうか」などと言って、生きる技術の一環としてお化粧を学ばせるのです。

宮崎 授業でお化粧の時間があるのですか。

橋爪 そうです、試しにやってみましょうか、という感じのものです。それで、お互いに「あなたがもっとあなたらしくなるにはどうしたらいいか」と試行錯誤をするのです。

それから、有名なものではプロムがあります。プロムとは学校が主催する卒業前のダン

スパーティーです。卒業パーティーみたいなものなのですが、この費用を全部自弁して、男女のペアが着飾って参加するのです。娘はまず最初に予算を立てました。ドレスが150ドル、ホテルの会場までリムジンで乗りつけるのですがその予算は相乗りなので割り勘だから30ドル、などと計算します。プロムまで何カ月だからアルバイトでこれだけ働かなければならない、と計画を立てます。プロム当日は夢のような日なのです。そのために節約・勤勉・貯蓄の3カ月となって(笑い)、ぼろぼろのジーンズをみな普段はいているのです。その切り替えが面白い。これは将来のお金の使い方に関する、あるいは人間関係の作り方に対する、一つの儀式ではないでしょうか。まずプロムの相手を決めるのが大変で、だれとだれがプロムに行くらしい、だれそれさんがだれそれさんに行こうと話したら断られた、そのような悲喜劇の、つまり自分がいいと思って選択しても相手にリジェクトされるということを、経験するのです。それもプロムなのです。プロムは学業と同じように、学校の一つの重要な任務と考えられているのです。

それから性教育の時間があります。非常に現実的な授業です。中学校の場合だと男の子がどう言い寄ってきて「ノー」と言いましょと、「ノー」の言い方も大きな声でなければいけないのですが、練習をするのです。そしてみな大きな声で「ノー」と言えるようになるまで授業が終わりません(笑い)。このようになっていました。

これは現実から、社会生活から、目をそむけていないということです。こうして子どもは、早く大人になりたいと思うのです。一方、日本の子どもはどうでしょうか。「18歳から上はおじん・おばんで、今が永遠に続けばいい」と思っています。ここに非常に大きな違いがあります。18歳になったらおじん・おばんだと思っていたが、実際はそうでもなくて、パラサイト・シングルとなっているのではないかと思います。

伝統、文化、パラサイト・シングル

宮崎 なるほど、そのような訓練のお話も非常に興味深いですね。しかしながらアメリカはマニュアル社会です。「AというケースであればBと対応し、CというケースであればDと対応する、そのマニュアルを習っていなかったからどう対応したらいいか分からなかった」という子が出てきたり、いろいろな問題が出てきます。マニュアルにはそのような側面がありますよね。ここで拍手をすると教わっていなかったので拍手しませんでした、感動したのにどうしたらいいか分かりませんでした、など、いろいろなことが出てきます。文化には表と裏があると思います。日本がアメリカになればいいのでしょうか。「日本の文化とは何だろうか、アイデンティティーとは何だろうか」、そのようなこともかかわってくる気がするのです。山田先生、そのような部分はいかがでしょう。

山田 よくパラサイト・シングルの話をした時に「これは日本の伝統文化なのだ」という話もお聞きしました。でも先ほど橋爪さんが話した通り、同居は伝統であったかもしれませんが、子どもも6歳から10歳ぐらいになれば親の手伝いをするのが日本の文化であったのです。同居することだけを日本の文化にし他のものは捨ててしまうのは、都合がいい考え方だと思います。

宮崎 すり替えであるのですね。

山田 ええ。「これが日本のコアの文化だから守らなければいけない、これが日本の文化なのだからこれでいい」という言い方はしないほうがいいと思います。もちろん今まで歴史的に積み上げられた日本社会の中でその特徴はあると思いますが、それを免罪符にはしていないと思います。私は日本の文化とは別の話だといつも言っているのです。

宮崎 なるほど。平安時代も女性は実家に同居し婿殿は通い婚であった、そのような話とはまた違うのですね。

山田 そうです。少子化対策の奥の手として、いわゆる源氏物語型の通い婚、つまり家を出たくないのなら実家に男性が通って子どもを産んで、そして子どもの母方の祖父と祖母が子育てをして、というパターンであったら、それはいいかもしれません。しかし、そうしたら歌を作るのがうまくならなければならないですね(笑い)。

宮崎 和歌を詠んでね。

山田 文化は発展するかもしれませんね。

宮崎 そうですね。マークス先生、いかがでございますか。

マークス 外国の話をするときに怖いのはその国の文化を例に出すことです。私たちが話すときはその例が参考になるとして紹介するのですが、「絶対いいからそうやれよ」と言っているわけではありません。えてして「絶対いいと言っている」と思われてしまうものなのです。そのことが怖いのです。その怖さのために例示を差し控えることもあるのです。江戸時代や明治時代を考えてみても、貧しければ子どもが親によって売りに出され、親を養うために子どもが仕事をしていました。むしろ日本の伝統文化は小さいときから働くほうが伝統のような感じがします。子どもが親に面倒を見てもらってぬくぬくと暮らすのはあまり伝統ではないと私は思います。

そして伝統であるか否かを抜きに、「伝統だからいいよ」とは言えないのです。山田先生がおっしゃった通り伝統ということだけで考えるのではなく、今、現に社会でどのような問題が起こっているのか、あるいは困っていることがあったり将来の日本に何か悪い影響があるのなら、当然変えるべきことです。むしろこのままでいいのであったら伝統であろうとなかろうとそのままにしておいても構わないのです。現にパラサイト・シングル現象がいくつかの場面で問題になっています。このままだと将来は日本の社会に勢いがなくなるのではないのでしょうか。あるいは極端なことを言いますと、今起こっているこの不況がずっと続いてバブルのようなことがもう二度とないとなれば、今パラサイトをしている人たちが親になったときはもう子どもをパラサイトさせてやるわけにはいなくなるでしょう。そのときには否も応もなしにパラサイトはなくなるのではないのでしょうか。伝統であろうと文化であろうとパラサイトはなくなるのではないかという感じもいたします。ただ

それがいつになるのか分からないので、むしろ多少でも修正できること、あるいは社会に悪い影響を与えていることで直していけるものは、教育でも家庭のしつけでも直していくのがいいのではないかと感じています。

先ほど橋爪先生からアメリカの教育の話が出ました。むしろ家庭が中心になることが多いのですが、イギリスも同じようなことをやるのです。学校に任せるより親がしつけるのが当然と思っています。ですから子どもにしてみれば、あのようならさいことを言われたくないと思って早く親から離れて自由になるために、一生懸命大人になるのです。

宮崎 どうぞ橋爪先生。

橋爪 パラサイト・シングルに文化的な面もあるのではないかと考えて、私なりに整理をしてみました。

パラサイト・シングルという現象は、苦勞して節約して子のためにお金を使う親と、それを受けてぬくぬくと育つ子ども、という組み合わせなのです。「自分のためにお金を使うのが何となく後ろめたい」という考え方が親の側にあります。勤儉節約という言葉が出ていましたが、これは、日本の伝統を一種背負っている面があると思います。本来あるはずのないお金を高度成長で突然手に入れてしまって、このお金をどう使ったらいいのか分からないのです。

お金の使い方にはいくつか選択肢があります。一つは貯蓄です。自分の老後のために本当は貯蓄しなてはいけません。あともう一つは自分で消費することです。働いた成果なのだから自分で使っていくのです。ところが、自分のために使うことに罪悪感がある。そこで将来に対する投資の意味も込めて、子どもにお金をつぎ込んで、子どもの教育と生活を支えるのです。その結果、成人しても更にお金をかけてしまうことになる。「それだったら、自分に使うのではないからいいのではないか」という思考回路によって、この傾向は増幅されていると思います。

ここで欠けている考え方は何でしょうか。そうです、「こんなにお金があるのだから、これを社会公共のために使いましょう、みなのためになることに使いましょう」という四番目の回路がないのです。自分の家庭の中に問題を限定し、三つの選択肢の中で、子どもに使うことへの優先順位が高くなって子どもにとりあえず使っている、これが現状だと思います。

これをすべて家族が横並びでやることによって、どうなるのでしょうか。長続きしないのです。勤儉貯蓄をしないで親から浴びるようにお金をかけてもらってこれが当たり前と思っている世代がそのまま大人になるのですから、次の世代になったら自分を支えることすらできなくなってしまうのが当然ではないでしょうか。

若者の努力を正當に評価するシステムを

宮崎 今の橋爪先生のお話、そしてマークス先生のお話でしたが、これは放っておくとどうなるのかという部分です。山田先生のご研究ではこのままいくとどうなるのでしょうか、20～30年たつとパラサイトの状況はどうなるのでしょうか。

山田 マークスさんがおっしゃったように20～30年後に若い人はパラサイトできにくくなっていくことは確かだと思います。今でさえも大学の授業料を親が払えないので退学するケースも少しずつ増えているのです。ですから今でも徐々にパラサイト・シングル自体の数は減っているのです。でも、パラサイト・シングルがなくなればそれで社会は良くなるということではないのです。

私はパラサイト・シングルが生み出される社会が多分問題なのだと考えております。そのような社会がそのまま続いってしまうと次第に若者の活気がなくなっていくと思います。先ほど橋爪さんが教育のところでおっしゃいましたように確かにパソコンやテレビゲームはいい製品を作るかもしれませんが、あるとき私は学生に「おまえ、テレビや液晶の仕組み知ってるか」と聞いてみたのです。文科系の学生なのですが、そうしたらもう全く返答に窮しておりました。WindowsやMacは使えるし携帯電話の操作はすごく熟練しているのです。しかしそのような小手先の技術はすぐ楽しみになりますからやるのですが、こつこつと基礎技術を学んで生かすことは「そんなにこつこつ努力したってしょうがない」と思うってしまうようなのです。そうすると日本社会から徐々に活気が失われてくるのではないのでしょうか。私にとってはそのほうが心配なのです。

宮崎 「こんな私にだれがした」という歌がありました。こんな社会にだれがした、そして、どんな社会にだれがする、ということですね。社会の環境をどのように分析していくかがまた大きなポイントになってくるのではないのでしょうか。

今日大勢おいでいただきました会場の方々も発言したいと思っていらっしゃるのではないのでしょうか。会場の中にマイクが回るようになっております。ご意見・ご質問等がございましたらここで伺う時間を取らせていただきます。ご意見を伺ったうえで、また更に議論を深めていきたいと思っております。できましたら簡潔に1分程度でおまとめくださいませ。ご意見のある方、どうぞお手をお挙げください。では、後ろの席の男性の方、どうぞ。

(会場参加者) 山田さんと橋爪さんに質問がございますのでお答えいただければありがたいのですが、山田さんは今の若者の努力を買ってくれる社会を作ればパラサイトは直るだろうとお話をされたのですが、どうやればそのような社会ができるのか、これをお答えいただけませんかでしょうか。

ふたつ目です。悪く申しますとパラサイトは家にかじり付いて生きている人間、あるいは家へこもっている人間です。そうしますとよく似た現象が並んでいます。例えば不登校も家へかじり付いていますし、引きこもりと言って高等学校へ行っても大学へ行っても学校へ出られないもあります。彼らが成長するとパラサイトになりまして、それから後はどうなるのかまだよく分かっていないという格好です。橋爪さんには、このような引きこもりのようなあるいはオタクのような現象と、パラサイト・シングルとの連携の有無をお答えいただけませんかでしょうか。

最後に一つ。私は悲観論者でございます。むしろ恵まれていますからパラサイト・シングルの状態にはあまり心配していません。ところがそれだけでは済まないのです。引きこもりの中には次第に社会に適応できない人間が出てきます。今のような状態が続けば、こ

れからの若い世代の興味は三つになります。一つは遊びです。二つ目に関心を持つのはセックスです。三つ目は麻薬です。男の子も女の子も非常に変わった人間になりはしないだろうかと思います。そのような恐ろしい時代になって、遊びのため、セックスのため、あるいは麻薬のために、人を殺すような新しい世代が出てくると私は心配しております。それに対して何かいい回答はないのでしょうか、ぜひお二人にお尋ねしたいのですが。

宮崎 ありがとうございます。大変要領を得たご質問をいただきました。お答えいただきましょう。山田先生、どうすれば若者の努力を買ってくれる社会にできるのでしょうか。

山田 会場が暗くて顔が見えなかったのですが、実は今の方は私や橋爪さんの先生でございます。本当に論文の口頭試問を受けているような(笑い)気がいたしました。

私は、「若者たちの努力の評価は、仕事の評価を置いて他にない」という気がいたします。つまるところ日本社会は年功序列であり、会社に縛られた生活が待っています。一部のエリート女性にはいろいろな職が開かれましたが、普通に会社に勤める女性たちにはやりがいがない職場になっています。いくら仕事で努力をしても一向に出世をしないし、一方でぶらぶらしてパソコンもできない上司が威張って自分よりも高給を取っている、このような状況を見てしまうと遊んで楽しんでしまおうとするのも仕方がないと思います。

第一は仕事においてのその人の実力なり能力なりを正當に評価できるシステム作りを早急に進めることです。つまり年齢や性別にかかわらず評価する、評価してくれる、ということが一番だと思います。

それにつながる教育も必要です。橋爪さんがおっしゃったように、教育の場面でも嫌なことを経験させないのは教育ではありません。嫌なことに対してどう対処したり苦勞に対してどう対処するか、その対処する喜びを経験させるのが教育なのです。つまり楽しんで楽しんで得る喜びよりも、先ほどのプロムの例のようにいろいろ苦勞し失敗しながら何かを成し遂げるほうが楽しいんだという経験を、学校教育の中に取り入れていくことです。そのように教育が変化していったらいいと思っております。

宮崎 ありがとうございます。それでは橋爪先生、不登校や引きこもりといった傾向との類似性の有無についてお願いいたします。

橋爪 難しい問題ではありますが、私は「パラサイト」、「不登校」、「引きこもり」、「オタク」、これらはそれぞれ別の現象だと思います。もちろん共通の根はあります。

パラサイトは、ある家族の状態、子どもには必要な社会性が備わっている。ただ、経済的・心理的に親に依存している生活が有利だと判断している状態だと思います。

オタクは難しいのでこの際割愛します。

不登校は、学校との関係ですが、学校の側に原因がある場合もあります。不登校の生徒でも、大検スクールだと伸び伸び勉強できるというケースがあるので、判断は分かれると思います。

引きこもりは社会的不適應の一種で、悪循環が家族の中に生じている状態です。私が知っているケースでは、親以外の人間が無理やり家族の中に入ってくると劇的に改善されま

した。

これと先ほどの「遊び」、「セックス」、「麻薬」による犯罪は、少しカテゴリーが別のような気もするのですが、じゅうぶん注意しなければならないというご指摘は、承りました。

それで、これらをどうしたらいいかについて、少しだけ付け加えたいと思います。先ほどお金の使い方に関して話しましたが、まず、親の世代が子どものためにお金を使おうとあまり考えず、自分のために使うようにします。「自分の生活をエンジョイし、人生の中で今まで自分ができなかったことを、元気な間にやっつけていこう」と思ったほうが子どものためにもなると、この際割り切ります。

二番目に貯蓄をします。子どもにお金を直接渡さず銀行に預けるのです。銀行は子どもにお金を貸すようにします。子どもが学費を奨学ローンを借りて自弁するようになると、返済計画に従って人生を設計していかなければいけません。そして自立が促されるのです。親が学費を出すと、返す必要がないものですから何の設計もしないのです。これで違ってくるのではないのでしょうか。このような仕組みを作ることが大事だと思います。

宮崎 経済対策的にはいかに親が貯蓄したものを子どもが引き出すようにするかということですか。

橋爪 一生懸命勉強して将来設計がしっかりしている学生たちに、努力や将来性に応じて、銀行が奨学ローンを出すということです。今は学生には努力や将来性という担保を認めないので、銀行は貸さないのです。土地を担保にしても仕方ないのです。土地の上で経済活動が営まなければならない駄目です。奨学ローンの担保の基本は将来性ですから、将来世代に貸すというやり方なのです。

宮崎 分かりました。マークス先生、今のご二つのご質問についてお願いいたします。

マークス 全く賛成です。先ほど橋爪先生がおっしゃった奨学ローンはイギリスでもやっています。親が貯蓄して将来性のある学生に貸すこととは違いますが、同じような考え方に基づいています。

イギリスでは、97年まで大学に入学したイギリス人の学生は授業料は無料でした。ところが最近では景気が良くなり親の収入が多くなったのだから、そろそろ払ってもらおうではないかということになり、2年前から1年間にかかる授業料などの費用は一律千ポンド、日本円で大体20万円、と決められました。

この千ポンドを親が出せない場合、土地を担保にではなく将来を担保にして大学に行く学生に1年あたり千ポンドを銀行が無利子で貸すということを、政府が決めました。政府が決めたのでは銀行は断れません。銀行は奨学ローンを全部出しております。そして学生は就職したとき、職業を持ったときにこのローンを返さなければいけないのです。

そうしましたら今度は、実はお金が出せても、親が「うちの子もローンにしますよ、授業料は払いませんよ」と子どもに話したのです。「子どものためにうちで出しますが、これはローンですから、卒業したら全部返してくださいよ」と言って、親も子どもに出す授業料をローンにしているのです。このようにいろいろなやり方があるのではないかと思います。

宮崎 ありがとうございます。それでは、もうお一人……前の四番目の女性の方に、マイクをお願いいたします。

夫婦間の自立、親子間の自立、社会の在り方

(会場参加者) 山田先生のご本を読ませていただいたのですが、先生のおっしゃっていることは親と子のパラサイトだと思えます。先ほど、マークス先生が夫婦間も自立をなさいと例を引かれてお話してくださいました。私は今、夫婦間の自立に非常に関心を持っている者なのです。

最近結婚した若いカップルでは妻は専業主婦であるにもかかわらず、料理も何も家事をしないで夫にやらせようとする風潮が出てきたと聞きました。それは山田先生がおっしゃる夫婦間のパラサイト、パラサイトの夫婦版の成れの果てではないかと思うのですが、いかがでございますか。

宮崎 ありがとうございます。ちなみに、お子さまはいらっしゃるのですか。

(会場参加者) 私は息子と娘がいますが、もうかなりの年になっています。

宮崎 独立されてますか。

(会場参加者) はい。同居している者ではございません。

宮崎 分かりました。ありがとうございます。このようなお立場からのご意見でございます。もうお二人伺って、まとめて答えていただきましょう。いかがでしょうか。

では、その立ってくださった方と、前の白いお洋服の方と、お二人にお伺いしましょう。

(会場参加者) 山田先生がどうすれば希望の持てる社会になるかと言われましたが、僕はどうすれば変わるのだろうかと考えたのです。それは自分に自信を持つことだと思うのです。自信を持つ一日一日を暮らしていくことが周りにも影響を与えて良くなっていくのではないかと思いました。

もう一つ、話します。パラサイト・シングルは子どもが親に依存するのですよね。親は僕の小さいころに別居して親も僕もすごくつらい生活を送ってきましたが、親はそれでも子どものためにいろいろやってくれたのです。僕はそのたびに「親に返さなければ」、「親には苦勞させてはいけない」といつも思ってきたのです。しかし逆に、実は親が僕に依存してたのではないかと僕は気づいたのです。

子どものためにやってあげていたようですが、実は親が子どもに依存していたのではないのでしょうか。先ほどははじめの方が「引きこもり」や「閉じこもり」の話をしましたが、引きこもったり閉じこもったりするのは親が子どもに依存し過ぎて過保護となり、子どもも親に依存していたのではないかと、と思いました。

宮崎 ありがとうございます。自分に自信を持って生きられる社会が来るかどうかですね。それから、子の親への依存ばかりに光を当ててではなく、親の子に対する精神的な依存と自立の問題もありました。これは親の側の問題かもしれません。後ほどまとめて答えていただきます。もうおひと方、こちらの白いお洋服の方、どうぞ。

(会場参加者) 私も最近このようなフォーラムにいろいろ出まして、共通項がありますので述べさせていただきます。

私は息子が二人おり、一人は結婚し、もう一人は別にきちんと生活しているのですが、もしかしたら自分はパラサイトされているかもしれないと思います。自分の母親が兄のほうに行ったり私のほうに来たりで、お互いに面倒見ているという状態です。それは日本の社会から生まれるものと私は思っております。社会現象から、必然として生み出されたものです。

今の社会を考えますと、とにかく動きがないのです。個人個人が生かされていないと思います。まだ学歴社会でもあります。私は今、スーパーの掃除をしております。大学も出ております。それで専門の仕事も持っております。アメリカに渡り帰国して、裸一貫ゼロからの出発でした。何もなかったところから始めましたが、いくら一生懸命掃除をやってもそれがなかなか評価されません。時給700円、4時間で2,800円です。毎日食べていくのも大変です。一生懸命やっても日本の今の社会では評価されないのです。

また、周りを見ると、若者で自ら命を絶とうとしている人たちもいます。それはある意味では絶望的になっているのでしょうか。命の大切さということも失われている社会ではないかと思えます。

それから情報・マスコミ社会、コンピューター社会になっておりますので手作りが尊重されません。私は手作り派で、歩くほうで、走るほうなのです。コンピューター化されたためにその大事さが評価されないと私は思っています。自然と人工、科学とその逆の相反するもの、という混沌とした状態に今いると思います。

日本がサラリーマンの世界で来たということで、私も非常に矛盾を感じるのです。前は家督制でした。今は男性に対する会社の評価によって間接的に妻の仕事が評価されるので、女性は自立ができません。尽くしてきたために自立ができないのです。それぞれの老後を保障されなければならないし、どのような小さなものでも命、その生が尊重されなければならないと矛盾を感じます。

宮崎 ありがとうございます。まとめて問題点を指摘していただきました。掃除の仕事にしてもコンピューターにしても、人間の尊厳をどう見つめていくのかが根底にあるのではないかと感じながら伺っておりました。会場のご意見・ご質問等を念頭に、3人の先生方にお話をいただきたいと思えます。

まず質問の答えをそれぞれおっしゃっていただきます。その後、最終的に近未来の家族ビジョンをどのようにご覧になるのか、次のラウンドで話していただきます。

では、お答えを、山田先生からどうぞ。

山田 質問ありがとうございます。夫婦間の自立という問題でも、両親の機能を配偶

者に求める傾向が男性にも女性にも強いと思います。女性は「お父さんが稼いでお母さんが家事してくれたのだから、私は結婚してもそのような立場にいたい」と夫に求めてしまうのです。逆に夫にも似たようなことが起きていると思います。男性が悪い、女性が悪いということではなく、親と同居していた経験から「してもらうこと」を当然と思うことが問題ではないか、これが一つです。

二番目には、心理学用語で言えば共依存に近いと思うのですが、親も実は子どものためにしていたほうが楽なのです。橋爪先生のように自分のために使うとしたら、自分で計画し自分で設計しなければいけません。それはやはり大変なことであるし、とにかく子どものためにお金をかけていけば周りからそれでいいと言われます。子どももうれしそうだから、また、親も子どものためにやっているほうが楽だから、という面があるのではないのでしょうか。

最後の方のご意見なのですが、あるように見えて日本社会には動きがないことは、私もいろいろなところで実感しています。年功序列制度の見直しなどで会社が今変わっていると報道され、確かにニュースでは新しい試みをやっている会社を取り上げられます。しかしながら日本社会の大部分は年功序列的、終身雇用的な考え方を前提に作られていると思います。

例えばうちの学生に「もう大きい会社に就職しなくて、小さい会社で自立してやっていけば能力が評価される社会が来るよ」と言いますと、ある学生から「先生、ほんとに来るのですか」と聞かれるのです。「そうではなかったらどうしてくれる」とは言いませんが、「本当に来るか」と言われるとこちらも返答に詰まるのです。「じゃあ、大きいとこに入っていたほうがいいんですね」「うん」とやはり答えるしかないのです(笑い)。

変わっているように見えながら根本では変わっていないので、若者に希望を探しにくくさせている、つまり信用されていないと思うのです。だからどう変えろと言われると、また難しい問題が出てくると思います。

宮崎 ありがとうございます。ではマークス先生、お願いします。

マークス 重複するところがあるかもしれませんが、夫婦のことについて、おふた方が男の方ですので私が女として「男が悪い」と言いたいところですが、そのようなことは言いません(笑い)。

ご夫婦の間の依存があるか、あるいはパラサイトがあるかに関しては、ご夫婦それぞれの問題であって人がどうこう言うべきことではない、と私は思っているのです。もし夫婦が12歳と13歳なら話は別ですが、大人の人間として夫婦の間で話し合い了解のうえであれば、「おれが稼ぐからおまえはそれを使えよ」、「私が稼ぐからお父さん、あなたはこれ使っていていいよ」、そのどちらがあっても私は構わないと思います。

ただ問題は、親にいろいろしてもらってきた若い女の人たちの中に、夫がしてくれるのが当たり前だという考えの人が割合多いことです。今もって多いということでびっくりしています。ついこの間もフリーターに関するテレビ番組を見ておりましたらそのような女の子がいて、「私は今フリーターで、親に寄り掛かっております。でも、結婚する相手は丈夫で長持ちして、安定した職業の人がいいです。そうすると私はずっとそこでもまた依存

してられるから、親から夫へ変わっていつとずっと依存の一生を送りたい」と言った人がいました。すごいことを言う人もいるものだと思いますが、そのような人が出てくるという心配はあります。

ただ、男女平等についてはいろいろな意見がありますが、一方的にこれが悪い、あれが悪い、専業主婦がいい、悪い、という言い方で決め付けられない、決め付けてはいけない時代になっていると思います。専業主婦の人は専業主婦と呼ぶかどうかは別として、母親として立派な仕事をしてほしいし、妻として立派な仕事をしてほしいのです。そして夫がそれに満足するようなものであってほしいのです。

奥さんも「自分がこれだけのことをやったのだ、家族をこれだけ立派に守ってきたのだ、子どもをこれだけ育ててきたのだ」と誇りを持ってもらえるような奥さんであり、結婚した相手であれば問題はないのです。「自分が専業主婦であるから、だから人におんぶされて、自分は駄目なのだ」と思ったり、あるいは「子育ては外に出てお金を稼いでいることより劣るのだ」とする必要は毛頭ないのです。女の人の独立や自立は私も話しますが、お金が問題にあるのはおかしい気がします。「お金を稼ぐ女が、お金を稼がない主婦よりもえらい」という決め付け方はおかしいという気がいたします。

それで、どのような暮らし方をするのか、どういう生き方をするのか、ご夫婦の間で解してほしいのです。夫婦の問題はとても大事な問題になるのです。親子の場合には私も全く山田先生と同じで、子が親に依存するだけでなく親が子に依存しているところがとても多い気がするのです。これも夫婦がしっかりしていれば親も子どもも双方が依存しないで済むのではないのでしょうか。

極端なことを言いますと、夫婦だけで楽しむのです。先ほど子どもにお金をかけるほうが楽だと話がありましたが、例えば、イギリスでは子育てが終わって子どもが20~30歳になって独立や結婚をしますと、50代の夫婦が「さあ、これから二人で何かやろう」と考えるのです。そして子どもが帰ってこれないように財産を全部売り払って、世界一周の旅に出るのです。そのような大きなことをやるのです。日本のようになってしまうと夫婦で老後を楽しもうとしても、ものはほとんど買っているのです。それならば家売ってヨットを買って、そして2年間ぐらい子どもの顔も見ないで「はい、さよなら」と行ってしまふ、そうすれば夫婦の間がしっかりして子どもも依存しようがないですし、親も子どもに依存しようがない関係になるのではないのでしょうか。

もう一つ、先ほどから学歴社会の話が出ておりました。確かにいろいろな弊害があると思います。日本は非常に固定化しているのでもその国の学歴社会より弊害があることは確かなのですが、能力主義になったら全部解決するということもありません。どのようなシステムを取ったとしても必ず悪いところがあって、善し悪しの両方を考えないといけないのです。能力主義になったときに1億3千万人がみなビル・ゲイツになれるわけではありません。ビル・ゲイツはいるが、そうではなかった人、そうなれない人、そのような人たちの能力も認められなければいけないのです。人間の評価が社会全体の中でもう少し変えられてお金ではない評価のしかたが出てくれば、さまざまなものの評価のしかたが変わってくるのではないかと思います。

宮崎 ありがとうございます。では橋爪先生、お願いいたします。

橋爪 時間もあまりないようなのでなるべく簡単に話したいと思います。いろいろなお質問、とても興味深いことが多くありました。

まず、「夫婦の在り方は夫婦同士の問題だから、双方の合意があればどういう役割分担があってもいい」というものがありました。まさにその通りだと思います。

では親子の間柄はどうでしょうか。子どもに対してそれぞれ父なり母なり役割を担うのですが、これはどのようなものであってもいいということにはなりません。その社会の標準となる原則のようなものがある。父として母として子どもを育てるにはパターンがあって、「それを担っていくんだぞ」という義務や役割のような部分がどうしても残ってくるのだと思います。そこで私は、最近あまり重視されていないことを二つ言いたいのです。

一つは「親が子どもを怒る」ということです。怒ることはとても大事です。がんとしてそこに一つの意思が存在することを子どもに示すのです。子どもには大きな刺激になります。子どもを怒ってみますと、その後子どもにはそれをカバーし関係を修復しようとするいろいろな親に気を遣っている様子も見られますし、変化が起こります。しかられたことを、喜んでいるふうもある。このような刺激を定期的な間隔で与えることは、ある程度の年齢になるまでは大切だと思います。

これは感情としての怒りの発露ではなく、「やってはいけないことをした、あなたが間違っている」ということを伝えるメッセージなのです。特に父親が怒ることが大事だと思います。先ほどから「してあげる」や「心地良くさせる」という言葉は出ていますが、怒っていないのです。怒ることはエネルギーが要ります。怒ることは最大のプレゼントなのです。怒ることによって相手の人格を認め、同時に独立性が生まれると思います。昔のお父さんはよく怒ったものです。最近は怒らないようですが、ぜひまた怒っていただきたいのです。もちろんお母さんに怒っていただいても結構です。

それからもう一つ、子どもが物事を決めることは大変大切だということです。どのようなことでもいいですから、小さな時から子どもが決めるようにするのです。選択肢がいくつかあってその範囲内で自分で決めさせるようにする。親はそれを無条件に認め、受け入れるのです。

例えばこのガムを買うかそのチョコレートを買うか子どもに決めさせて、決めたら親は文句を言わないのです。3歳であったらチョコレートとガム、5歳であったら、7歳であったら、10歳であったら、というように子どもにある範囲のことは必ず決めさせます。親はそれを認めるのです。何でも決められるようになったとき、どうなるか。それは大人ですから「じゃあ、さようなら」と親の元を去れば良い。そのように計画的に子どもの領域を育てていくことが大切なのです。

この二つが欠けていると思うのです。このことが手掛かりになるのではないのでしょうか。

夫婦関係と親子関係の見直しを

宮崎 ありがとうございます。もっと伺いたいのですが、いよいよ時間が迫ってきました。最後に「近未来の家族ビジョンについて」を念頭にまとめをお願いいたします。いろいろなお立場からのお話があると思います。

では橋爪先生からお願いいたします。

橋爪 ここしばらく家族の在り方が「子ども中心」、「子どものための家族」、「子どものことをこれだけ思ったのだから子どもも親のことをこれだけ思ってくれるだろう」というものでした。この際それはやめて、家族の中に「夫婦のための」という原理をもっと入れていいのではないのでしょうか。この原理は「子どもはいずれ出ていくから、家族の中心は夫婦であって、夫婦できちんと活動していこう」ということです。それは同時に、親の側はもう少し意識し自覚して社会性を取り入れていくことだと思ふのです。特にお母さんが中心になって、家族と社会のつながりを積極的にもっていただくのです。

日本には教会が少ないので教会活動はしにくいですが、それに代わるものとして地域の活動、政党の活動、ボランティアなど、チャンスはいろいろあると思います。そのようなことが一つのかぎになるのではないのでしょうか。

子どもの側に関して言えば、自立を促すことがとても大事だと先ほど言いました。親子の関係に関して、個々の親ができることには限度があります。ですから税制・相続・奨学金などのさまざまな制度を「お互いに持たれ合うことを促進するような制度」から「お互いに自立し、社会人としてそれぞれの持ち場を守ることで評価される制度」に改めていかないと、現状はなかなか変わらないのではないかと思います。

宮崎 ありがとうございます。ではマークス先生、お願いいたします。

マークス いろいろ申し上げましたし先ほど橋爪先生も話してくださった、そのようなことでほとんど満ち足りて、これから社会が良くなってパラサイト・シングルもいなくなって、明日から万々歳ということになればいいと思います。しかし社会はどんなにいいことを言っても簡単に変わるものではありません。皆さんここに今日おいでになった方が今日から変えようと言って、それですぐに変わるものではありません。何か自分たちでできる一つの小さいことを見つけて、そこから地道にやっていく以外にはないのです。先ほど若い方が「毎日毎日、自分が自信があれば……」とおっしゃいました。そのようなことも含めて、今これだけは守ろうと思うことを日々実行することがとても大事なことだと思ふのです。

「みなに優しくしよう、親切にしよう」ということだけが強調されて、「悪いことを言うてはいけない、冷たいことをしてはいけない」という誤解がかなり長い期間あったようです。

「優しく走ろう〇〇県」などという標語がありますが、車で走るときは優しくしないほうがいい場合もたくさんあります。また乱暴にすればいいのでもありません。その中間に常識というものがあるのです。子どもを育てたり学生に教えたりするときもそうです。何もかも親切に教えてくどいように語り続けることより、突き放すほうがいい時期がたくさんあります。かつての日本人はそのようなものを非常によく心得ていた気がいたします。

今は先生の授業も何度も黒板に書いて、またコピーを作って渡したりするような繰り返しがあまりにも多くなり過ぎて、なぜか冷たく突き放せない感じになっています。特に子どもに対しては、親が非常に大事にするところと冷たく突き放すところの両方があったほうがうまくいく気がするのです。実は以前は年を取ってきたらなるべく優しい社会がいいと私は思ってきたのですが、本当はそうでもない気が付きました。年を取ってからも冷たいところがあっていいのです。

例えば私自身が最近少々足を悪くして感じており、また私の母の介護を最後に見ていた時にも思ったのですが、年寄りも60歳を過ぎますと還暦のせいなのか子ども返りするようです。私もそうでした。甘やかしてくれると思うといくらでも甘えてしまうのが年寄りの特徴でもあります。もし間違っていましたらごめんなさい(笑い)。

むしろ甘やかさないで、「それ自分でやりなさいよ」と言われるとやれるのです。やれるのにやらせないで「おばあちゃん、かわいそうね」と言われると、本当にかわいそうな顔になってしまいます。これは気を付けないといけません。どのような人々に対しても少し冷たいところのある社会を作ったほうがいいのではないかという気がしています。

宮崎 ありがとうございます。それでは山田先生、お願いいたします。

山田 もう時間が短くなりましたので簡単に話します。まず夫婦関係に関しては自分たちで楽しいと思うことが大事です。もし夫婦で楽しめないのなら別の人を見つけても全然構わないと思うのです(笑い)。子どもも「夫婦であるように楽しい生活を送れるのだ」と感じれば、独立して結婚しようと思う若者は増える気がします。逆に「あのような夫婦になりたくない」と思えば子どもは結婚しなくなり、また非現実的な夢しか見ないようになるのでしょう。

親子関係に関しては橋爪さんが「怒る」、マークスさんが「冷たくすることも必要じゃないか」と発言されました。多分今の50代、60代の人には「もし冷たくしてしまったら子どもは出ていってしまうのではないか、怒ったらもう見捨てられるのではないか」と思っている気がいたします。つまり親子の愛情をあまり信じていないから、子どもに対していろいろやろうとするのではないかと思うのです。私は家族社会学を長くやっていますが、「何かやってあげたから関係が良くて、やってあげなかったから恨まれる」などというのは私が見ている限りありません。人間関係は「やってあげる」、「あげない」以外の関係を大切にしていく必要があるのではないのでしょうか。それを信じる必要があるのではないかと思います。どうもありがとうございました。

宮崎 ありがとうございます。

まとめ

加藤 寛

ライフデザイン研究所 所長

皆様方、ライフデザイン研究所主催の第13回シンポジウムに、お忙しい中をおいでいただきまして、誠にありがとうございました。私もずっと聞いておりました、なかなか難しい問題が今日本で起こっていると感じたのでございます。皆様方ご承知だと思いますが、ベルリンの壁が崩れ一つのドイツになりました。その当時、東ドイツは共産圏でございましたから、東から西へ自由を求めて国民がどんどん出国してしまう、ということが起こりました。そこでホーネッカー議長が心配して奥さんに言いました。どんどん出国してしまったら「最後には君と僕と二人だね」と奥さんに話したのだそうです。そうしたら奥さんが「もうすぐあんた一人よ」と返事をしたというのです(笑い)。すごい話でございますね。これくらい人間はお互いを考えていないのでございますから、私はそのような中で少子化が進んでいくことは大変なことだと感じました。

皆様方もご承知のとおり、現在の日本の人口は1億2千万でございます。その1億2千万の人口が2007年になりますと減少に向かいます。総人口減少でございます。最初は1年に1万人ぐらいしか減らないのですが、少しずつ減り方が大きくなっていくのでございます。2050年、つまりあと50年のうちに、1億2千万の人口が9千万に、そして2100年には6千万に減少していくのでございます。これは大変なことでございます。

もし人口9千万で今の生活水準や技術水準を守ろうとしますと、それだけ国外から入ってくる外国人の人口を増やさなければなりません。1億2千万から9千万に人口が減少するということは、3千万の外国人が日本に入ってくることを意味します。そして2100年に人口6千万ということは1億2千万の半分でございますので、2100年にこの会場においでになる方の半分は外国人ということでございます。

もう日本人はそれだけしかいなくなるのです。これを数字の上で計算いたしますと大変なものでございます。3000年まで生きていらっしゃる方はまずいないと思いますが(笑い)、3000年の人口を計算しましたら一人でございます(笑い)。日本人が一人になったら寂しいですね。周りが外国人ばかりなのです。そのような状況に私たちはやがて至るかもしれないということを、数字の上では考えておかなければなりません。ということで、少子化が大変な問題だと私たちは感じるのであります。しかし、その少子化が一体どこから起こっているのでしょうか。パラサイト現象から起こっているという説明もあり、逆に少子化があるからパラサイトが起きるといふ説明もあります。どちらも私は論理的な根拠があると思っています。しかし大切なことはパラサイト現象は善でも悪でもなく、人間が一個人として自由に自立して生きていくことが重要であって、それを守るためにどうしたらいいかということでパネリストの先生方に熱心にお話をさせていただきました。

お聞きになっていらっしゃる方がすぐお分かりになったと思いますが、パネリストの先生方は一人もパラサイトが悪いともいいともおっしゃっていません。自立し、自由な、私たちが本当に生きがいを感じる社会を作るためにどうしたらいいか、ということをお話になっていたのでございます。それをお聞きして、パラサイト現象は今確かに大きな問題では

ございますが、私たちの社会では自立する心を作ることは決して難しいことではない、と私は思いました。共産圏では自立する心を作ることは難しいのです。しかし自由が与えられている私たちの社会では、自立する心を作ることができるはずでございます。

そこでどのような方法があるかと思って聞いておりましたら、なかなかすばらしいことをおっしゃっていました。

まず、外国の社会では「18歳になったらとにかく自立せよ」という考え方があることでした。つまり、「うちにいることがおかしいと思わせる、18歳では自立することを考える、自信を持たなければ駄目だよ、そのような社会のムードを作っていかなければならない」と。このごろカルガモの話がよく出ます。鳥ですから18歳というわけではありませんが、ある程度大きくなったら親ガモが子ガモを「もう飛びたてよ」と放してやるのです。そうすると子ガモは必死になって、いろいろな動物に襲われたりしながら、何とかして頑張って生きていくようになると思うのです。そのようなことをまずやりなさい、これが一つです。

それから二番目には、「親が、子どもを叱らない」、これがいけないのです。子どもを叱りましょう。親が子どもを叱るだけではありません。自分の子どもでなくてもおかしいことをしたら叱らなければいけないのです。あまり年を取った人を叱るといけません。また18歳の少年を叱りますとぶすすとやられますから(笑い)、相手には注意をしなければなりません。しかし少なくとも子どもが悪いことをやったら、親は社会の親として子どもたちを叱っていかねばなりません。家庭の中ではもちろんです。自分の子どもでございませから当然叱らなければいけないのです。これが第二。

三番目、これは私には理解しにくかったのでございます。「夫婦がパラサイトにならないためには冷たくしたほうがいい」(笑い)、これはなかなか難しいことでございます、つい優しいことを言いたくなるのです。「冷たくしたほうがいい」と言っておりましたら、別の先生が「いや、そうじゃない。夫婦は仲良くやっているなら、それをモデルにして自分たちもパラサイトにならないようにしようとするのだから、それはむしろいいことだ」と。どちらがいいのか私もよく分かりません(笑い)。それは夫婦で決めていただくことにいたしましょう。皆様方がお帰りになりまして、このシンポジウムでパネリストの先生方がいろいろおっしゃっていただきましたことを、一つ一つの問題として心の中に刻んでいただきまして、そして、明るい日本、生きがいのある日本を作れるようにしていただきたいと思ひます。

一つだけ念のために申し上げておきますが、先ほど外国では銀行がお金を貸して子どもが奨学金を得るようにし、そのお金を出世払いで返していくというやり方が紹介されました。実は日本でも既に始まっております。私どもの大学でもやっております。皆様のうちでお子様がおられたら、ぜひ私のところへおいでになってください(笑い)。そして、ローンでもって自立する子どもを育てていただきたいと思います、と思っております。

今日はパネリストの先生方、大変お忙しいところ、ご協力いただきましてありがとうございました(拍手)。

出演者紹介



山田 昌弘 (東京学芸大学助教授)

東京大学文学部社会学科卒業、同大学院博士課程単位取得退学。その後、東京学芸大学助手、専任講師を経て、現在、同大学教育学部助教授。1997年に新聞紙上で初めて「パラサイト・シングル」という表現を用いて話題となり、99年に「パラサイト・シングルの時代」を刊行。専攻分野は家族社会学、感情社会学。著書に「近代家族のゆくえ」「結婚の社会学」「家族のリストラクチュアリング」他多数。



マークス 寿子 (秀明大学教授)

早稲田大学政経学部卒業、東京都立大学大学院政治学博士課程修了。1971年ロンドン大学LSE研究員に。76年英国一のチェーンストア当主と結婚、男爵夫人の称号を得て、86年離婚。その後、エッセックス大学現代日本研究所日本語コース主任を経て、現在、秀明大学国際協力学部国際協力学科教授。著書に「大人の国イギリスと子どもの国日本」「ゆとりの国イギリスと成金の国日本」「ふにゃふにゃになった日本人」他多数。



橋爪 大三郎 (東京工業大学教授)

東京大学文学部社会学科卒業、同大学院博士課程修了。フリーでの執筆活動の後、1989年に東京工業大学助教授。現在、同大学院社会理工学研究科教授。学生時代から性、言語、権力を三つの説明原理とする「言語派社会学」の樹立を目指して執筆活動を続ける。専攻分野は社会学。著書に「言語ゲームと社会理論」「言語派社会学の原理」「こんなに困った北朝鮮」「選択・責任・連帯の教育改革」他多数。



宮崎 緑 (千葉商科大学助教授)

慶應義塾大学法学部政治学科卒業。同大学院法学研究科修士課程修了。NHK「ニュースセンター9時」初の女性キャスターとして草分け的存在。86年世界女性ジャーナリスト会議に日本代表として出席。テレビ・新聞・雑誌等でジャーナリストとして活躍する一方、アカデミズムの世界でも地歩を固め、東京工業大学講師を経て2000年より千葉商科大学政策情報学部助教授。著書に「女の耳目」「わたし会ったアジアの子ども」他多数。



加藤 寛 (ライフデザイン研究所所長)

慶應義塾大学経済学部卒業。経済学博士。慶應義塾大学総合政策学部長を経て同大学名誉教授。千葉商科大学学長。元日本経済政策学会会長。元日本計画行政学会会長。公共選択学会会長。日本学術会議13・14期会員。1990年より2000年まで政府税制調査会会長。著書に「福沢諭吉の精神」「『官』の発想が国を亡ぼす」「気概ある日本人無気力な日本人」他多数。

基調講演

山田 昌弘
東京学芸大学助教授

パラサイト・シングルの実例

こんにちは。東京学芸大学の山田昌弘でございます。パラサイト・シングルという言葉は、私が3年前に初めて日本経済新聞紙上で使い始めたのですが、最初本にするとき、このネーミングに反対したのです。それはなぜでしょうか。アメリカの記者に「パラサイトという言葉は気持ち悪く聞こえるぞ」と言われたのです。それはそうです。パラサイトとは寄生植物や寄生虫という意味です。きちんと翻訳してしまえば寄生虫独身者ということになりますから使いたくなかったのですが、編集長に説得され、「いや、これじゃなきゃ出してやらない」と言われて出版しました。そうしたところけっこう需要に合っていたのでしょうか、幸いにも反響を受けました。

まず、定義を一番最初に話したいのですが、学卒後も親に基本的な生活基盤を依存し、リッチな生活を営む未婚者をパラサイト・シングルと呼びます。当時「パラサイトイヴ」という映画がヒットしていたので、その「パラサイト」と「シングル」、つまり独身者を掛けたものです。

本を出して以来、私もいろいろ調査をしております、いろいろな事例が寄せられるようになりました。最近では名刺に「私はパラサイト・シングルです」と書き込んだ人も現れたといえます。日本では、カタカナ語の響きがいいのでしょうか、外国の人が見たら何と思うだろうかと、少々ぞっとしています。

私の妻が8歳の子どもを連れてある医院に行ったときのことで。開業医ですから診察室の声が何となく聞こえてくるのですが、そのときに60歳ぐらいの女性と20代半ばぐらいの女性が連れ立って来たのだそうです。最初、妻ははっきり「きっとこれは20代半ばぐらいの女性が、60歳ぐらいの年配の母親を連れてきたんだろう」と思ったのだそうです。しかし、中から聞こえてくる会話はその逆でした。60歳ぐらいの年配の母親が、娘の病状を説明するのです。「お医者さん、この子はこう言ってるんですよ」。そして、最後に、「うちの娘は今日会社に行かなきゃいけないって言ってるんですけども、どうでしょうか」という会話を聞いたのだそうです。このことがあって、いつもは私が書くことをばかにしている妻なのですが、「あんたもたまにはいいこと言うのね」と言ってくれました。

他にもたくさんあります。例えば、子どもの年賀状です。写真を年賀状に飾るものがよくあります。それもせいぜい小学校ぐらいでおしまいと思うのですが、私の友達に25歳の息子の写真を張った年賀状が届いたのだそうです(笑)。かわいいといえばかわいいのですが、それは子どもの方が少しは気持ち悪がらないかと思えます。そのような話をしていたら、多分1時間、それで終わってしまうと思うのです。

もう1つだけ話をさせていただきます。地方に行ったとき、ある女性が「うちはパラサイトとはいえないかもしれないんですけども……うちの息子は同棲してます」と言うのです。

「いいじゃないですか」。「でも」とその女性は言うのです。「自分に合った仕事が見つかるまで仕事はしたくないと言ってるので、生活費をうちから出してる」と言うのです。「それだったら息子さんと同棲している彼女が働いていらっしゃるんですか」と聞いてみたら、「いや」と言うのです。「どうも彼女も、好きな仕事が見つかるまでと言って働いてないようです。向こうも向こうの親が援助しているらしい」と。愛の巣を営むために20代半ばの2人へ、両方の親がお金を出しているというのでしょうか。

今話した例はもちろん極端かもしれませんが、それほどではなくても、親に家事などを任せて親の住居の一室を占領し、収入のほとんどを自分の小遣いにしてリッチな生活を送っている親元同居の未婚者は、かなり周りを見かけるようになりました。そして、親はそれを許すだけではなく、手伝っている面もあるのです。

また1つだけ例を話します。郊外に住んでいて夫を駅まで車で送り迎えをする妻は昔からよくいましたが、そうではなく、自分の娘を家から駅まで車で送り迎えをする母親が出てきたのだそうです。この話を聞いたときには「ここまでするか」と思いました。

そして今や、20代から30代の、パラサイト・シングル、親元同居の未婚者が、世界で最も豊かな生活を送る人々になったのです。

豊かで、そして生活満足度の高い存在

お手元の資料に図が1枚入っていますので、見ていただきたいのですが、「暮らしに対する満足感」についての総理府世論調査の図があると思います。総理府が大体2年に1回ぐらいずつ生活満足度調査をやっているのです。私は、この図をいろいろ眺めていて、この本「パラサイト・シングルの時代」を書こうと思ったのです。

1973年、ちょうどオイルショックの直前ですが、20歳代の若者は最も不満足度が高く、満足度が低い世代であったのです。そして年齢が高くなるに従って満足度が上がっていき、60歳以上の人たちが最も満足度が高い構造になっていたのです。つまり、経済だけでなく、ライフスタイル上も右肩上がりの意識を持っていたのです。しかし1997年の調査を見ますと、これがU字型、それも20歳代の若者が最も生活満足度が高い形のU字型になりました。この図を見ていて、1973年に20歳代であった人が一番割を食っているのがよく分かります。二十数年たったらこの一番低いところに来ているわけですから。全体としては少しずつ生活満足度は上がっているのですが、20歳代の若い人たちの上がり方がとても激しいのです。つまり、人生が始まったばかり、20歳代、大人になったばかりのころに最も良い生活をしているのが今の日本の状況です。

今、一番働き盛りで一番給料を稼いでいるはずの40歳代の男性が最も生活満足度が低く、社会に出たで給料が安いはずの20歳代女性が最も生活満足度が高いのです。これはどこか間違っているのではないかと考えていろいろ調べてみると、様々なことが見えてきたのです。

まず、経済的に豊かであるのは事実です。収入のほとんどが小遣いとして使えるのです。われわれの調査では、仕事を持っている場合と一緒に住んでいる親に渡す食費と称する金額は食事の材料費にもなりません。平均1万円から3万円です。5万円以上出している親元同居の未婚者はほとんどいませんでした。

そうです、私も、家族に渡すお金が3万円で残りの全部を小遣いとして使っているのあれば、それはもうリッチな生活が送れます。それができるのが親元同居の未婚者なのです。今アルバイトでも月に5万円から10万円は稼ぎます。生活費を全部親に見てもらって、そのバイト代を全部小遣いに充てられるとすると、その金額は40代でローンを抱えているサラリーマンよりも断然多くなるのです。だから首都圏未婚社会人の小遣いの平均額が7.5万円、女性で8万円となり、小遣いは10万円以上という人も首都圏未婚社会人の40%以上もいるのです。

では、家事はしているのでしょうか。これも調査した結果、ほとんどしていないことが分かりました。この点においては男性も女性も一緒なのです。つまり男女平等が日本ではどんどん進行し、その進行の方向は、男の子も家事を手伝う方向には行かずに、女の子も家事をしないというかたちであったのです。そうです、最近「家事手伝い」と言わないのです。「家事邪魔」と言うのです(笑)。

だから家事もしなくていい、小遣いも10万円ぐらいある、時間もあるのです。若いうちですから責任のある仕事に就いてもいないので有給休暇を取って海外旅行に何度も行けるし、高いブランドものも買えるのです。だから、あるフランスの高級ブランドメーカーの全世界での売り上げの約4割は日本が占めているのです。

ヨーロッパやアメリカで自立した生活をしていてまだ給料が低い若者が、何十万円もする靴やバッグを持てるわけがないのです。つまりそのようなことができるのが、まさに日本のパラサイト・シングルなのです。

どうということなのでしょうか。家の中では子どもなのです。家の中では子どもとして生活を支える責任は持たなくてもよいのです。親が全部生活の面倒は見てくれます。一歩外に出ると大人として扱われ、給料を稼ぐことができ、恋愛でき、海外旅行に行けるのです。つまり、大人と子どものいいとこ取りをしているのがまさにパラサイト・シングルの姿なのです。家に帰れば子どもとして保護を与えられます。子どもは多くの保護を与えられ、責任は取らなくてもいいのですが、一人前のことはさせてもらえません。一方、大人であれば自由にいろいろなことはできますが、自分で自分の生活を支えなければいけません。それでその両方のいいところだけを取ったのが、まさにパラサイト・シングル状況なのです。「こういう人は昔からいただろう」と言われもします。文学に造詣の深い方は夏目漱石の『それから』の代助を思い出すかもしれません。親に全部支えてもらって、何か好きなこと、やりたいことが見つかるまでぶらぶらしている人はいましたが、1970年ぐらいまでは非常に数が少なかったのです。

少子化と未婚化の最大の原因

私、計算して驚いたのですが、1995年時点で20歳から35歳未満の親元同居の未婚者が1千万人以上いるのです。日本では結婚していない人が増えたといいますが、一人暮らしの人よりも親と同居している人のほうが圧倒的に多いのです。男性は約6割、女性は約8割が独身で、20歳から34歳までの独身者の多くは親と同居しています。だから独身は、一人暮らしが気楽だから結婚しないのではありません。私は少子化・未婚化の最大の原因が親元同居の未婚者にあると見ています。彼女や彼らは「結婚したいのだけれども結婚しな

い」と言います。しかし親元でいい生活を送っていますから、それ以上の生活を求めようとすると、なかなか結婚は難しいのです。

インタビュー調査をすると、「いや、私は貧乏になっても構わない」、「おれは別に生活は豊かでなくても構わない」と言います。けれども、「子どもには惨めな思いをさせたくない」とも言うのです。女性であれば「自分の親はピアノをずっと習わせてくれて音楽学校まで通わせてくれた。自分の子どもにもそうさせたいからそれぐらいの収入がある夫じゃないと結婚しない」と。また、男性は本当にはっきりしています。「いや、おれには妻子を豊かに養う自信がないから結婚できない。まだそれは無理だ」と言うのです。

結婚が嫌だから結婚しないのではなく、子どもを持ちたくないから子どもを持たないのでもないのです。逆に、子どものためにという意識がいろいろあって、その中の一つがまさにパラサイト・シングルを作り出し、そのパラサイト・シングル自身の意識も子どものままなので、いい条件でないと結婚しない、ということになるのです。

結婚前の生活水準が相当高くなってしまっているのです。結婚後に期待する生活水準も高くなります。30~40年前は一人暮らしが多かったですし、親元にいたとしても兄弟も4人、5人いたので、早く家から出たいと思ったのです。家から独立して早く結婚すれば効率もよかったです。そして最初のうちは6畳風呂なしアパートであったとしても、社宅や官舎に入居してだんだんと豊かになっていく、そのようなことに若者が夢を持っていたのですが、今の若者はもう既に結婚する前から豊かなのです。

プライベートなことは話したくないのですが、私の知り合いのある公務員の男性が結婚して官舎に入りました。そうしたらどうなったのでしょうか……。「新婚生活どうだ」と聞くと、「新居に入った途端、奥さんが泣いちゃった」と言うのです。奥さんの実家は中流家庭で、家は一戸建てで個室があってきれいに飾っているのだそうです。30~40年前であれば官舎に入れたらそれは御の宇の生活であったと思うのですが、「奥さんの実家に比べれば、昔より良くなったとはいっても官舎は官舎だ」と。それほど新しくなくきれいでないところに入居したら、奥さんが「夢のような新婚生活を期待してたのに」と言って泣いてしまったそうなのです。

それでは親と同居して理想的な結婚ができるまで待つ人が増えてもおかしくはないでしょう。今でも、やはり専業主婦的な考え方がまだ強いのです。最近、若い人に限れば男性よりも女性のほうが強いかもしれません。専業主婦的な考え方とは、家事がしたいということではなく、そこそこの収入の夫と結婚しさえすればその夫が大体一生の生活の面倒を見てくれるはずだという思考です。

そうすると、自分の父親以上の経済力がつきそうな人と結婚しなければ、女性にとっては生活水準が落ちてしまうのです。もちろん共働きの環境が整っていればいいのですが、今の共働きの環境が整ってなくて大変なのです。

更に、親と同居しているキャリアウーマンの人では、家事はほとんど母親がやってくれるのだそうです。ある人は「お母さんがお嫁さん」と表現しました。母親がお嫁さんのようにキャリアウーマンを支えており、だから、「お母さんと一緒に結婚しなければ働き続けられない」という話も聞きます。だから、「2人一緒にもらってくれる人はいないかしら」と言うのです。最近もしかしたらそういう例もあるかもしれません。キャリアで働き続けるために、田舎に引退した女性側の両親を、東京に呼び寄せて近所に住ませた、そんなカ

ップルも実際にいるのですから。

男性は「喜んで家事・育児・介護をやってくれる女性がなかなかいない」と言います。つまり「おれの給料で喜んで」という意味なのですが。となると、結婚難、未婚化が、どんどん進行することになるのです。

最近私は、若者雑誌の結婚特集に呼ばれてコメントを求められることが多いのですが、それが面白いのです。男性誌では「結婚相手がパラサイト・シングル女性だと苦勞するぞ」という特集をやるのです。だから「一人暮らしの女性を選ぶと、しっかりしてて家事もやるからいいぞ」となるのです。そして逆に、女性誌だと「パラサイト・シングルの男性はお断り」になるのです。だから結局、親と同居の人は、なかなか結婚できなくなるのかもしれない。

いや、結婚しても問題があるかもしれません。この前あるカウンセラーから相談事例をひとつ、聞きました。詳しくは述べませんが、ある結婚したての専業主婦の方がノイローゼになったのだそうです。それはなぜでしょうか。相手の親から、つまり夫の親から次のように言われたのだそうです。「私はこの息子を非常に丁寧に育てた。うちの中では一度たりとも嫌な思いをさせたことはなかった」。息子の好きなものは食べさせる、「お茶を飲みたい」と言えば持ってくる、お風呂は入りたい時刻にちゃんと沸いている、つまり家にいる限り息子に嫌な思いは全くさせなかった、だから、「一度でも嫌な思いをさせたら息子を連れて帰りますからね」と言われて、奥さんはノイローゼになってしまったのだそうです。

それは極端かもしれませんが、似たようなことは結構あります。最近娘さんが結婚するとき「嫌だったらいつでも子どもを連れて帰っていらっしゃい」という親も増えていると聞きます。

親子関係と自立

では、なぜこのようなパラサイト・シングル、リッチに暮らす親元同居の未婚者が増加したのかを考えてみますと、まず直接的には近年の日本の親の態度にあると私は思っています。でもそれ以上に今の日本社会の在り方がかかわっています。つまり、特に若者は、今の日本社会に希望が持てなくなっているのではないのでしょうか。それについてお話ししたいと思います。

私はパラサイト・シングルの20~30歳ぐらいの人にインタビューもしますが、親の世代にも時々お話を聞いたり調査をしたりいたします。話を聞くと気持ちは分かるのです。つまり、自分は若いころ貧しくて苦勞したから、子どもには苦勞させたくない、という思いが基本にあるのです。「私は若いころ親が貧しくて学校にも行かせてもらえなかった。だから、自分の子どもにはそういう苦勞はさせたくないから勉強しろと言っている。自分は若くして結婚して好きなことが何にもできなかったから、自分の子どもには好きなことをやってほしい」と。

このような例もありました。「私は不本意な結婚をせざるを得なかったから自分の子どもには不本意な結婚をしてもらいたくない」、調査しながらも、「何だこれ」と、つい私は言いたくなりました。

また、このようなこともありました。「私のころは勉強したかったのだが勉強できなかった

た。だから、子どもをとにかく何でもいい、一生勉強するには何でも上の学校に進学させてあげたい」という親がいたので、調査でしたが、おかしいなと思って聞き返したことがあるのです。「今は社会人入学というのがありますし、大学院というのがあります。いろいろ勉強できる機会があるじゃないですか。40~50代になったって大学を出たり、大学院を出たりして活躍する人もいますよ」と水を向けてみたのです。そうしたら、その中年の女性は、「いやいや、私にはそんな能力がありませんから」と言うのです。この言葉を聞いて、20年前だって能力はないだろうと思いました(笑)。それはさすがに言えませんでした。これだから子どもはつらくなるのだと思いました。

欧米の親子関係、南ヨーロッパ辺りはやはり日本と似たことが起こっているらしく、イタリアやスペインでは親と同居の人が増えているという話を聞きます。しかし、主にプロテスタント系の国、アメリカやイギリス、あるいはフランスや北欧の親子関係を見てみると、やはり成人したら自立するのが原則である社会なのです。

もちろん、最近不況ですからイギリスでもだんだん親元にいる期間が長くなっているそうです。長くなっているといっても18歳が20歳に延びた、そんな感じなのだそうです。

「25歳や30歳になって、仕事もあるのに親と同居している男性や女性が1千万人もいる」と話すと、欧米の記者は「アンビリーバブル」と驚くのです。「何で家を出たくないのか、出ないのか」と。それはそうです。欧米では親元にいたら半人前、そして家のことを分担して当たり前、更に行動について厳しく干渉されるのです。だから自立できる給料をもらうようになると、さっさと親元を出ていくのです。

日本でも30~40年前はそれほど違っていなかったと思います。今の50歳、60歳ぐらいの人に話を聞きますと、「親元にいたころは自分が外で稼いだ収入を全部親に渡して、親から小遣いをもらっていた」と言うのです。自営業はそうです。自営業は個人が稼いだものは個人のものやっていたら成り立ちませんから、全部いったん大きな財布に集めてそこから各自小遣いをもらうシステムです。そしてそのシステムが各家庭にも残っていたと思います。

それが、大体1970年代から1980年代ぐらいに転換したらしいのです。つまり、子どもの給料は全部子ども自身の財布に入れて、そこから食費として親に何万円か渡すというシステムになったようです。従いまして、子どものために何でもするのが日本の本来の伝統であると、私には思えないのです。

そして、子育ての方針もやはり日本と欧米では異なります。欧米では、子どもを自立させること、苦勞に耐える力を付けさせることが、親の務めだと考えます。アメリカではそのような話がよくあります。親から成人したときに渡されたプレゼントが養育費の請求書でした、これはもうシートンです。そうです、『動物記』のシートン、NHKのクイズ番組「日本人の質問」で放送されていました。アメリカではそのような話があらゆるところに転がっています。つまりいかに親に世話にならずに自分の力でやってきたかが欧米では評価されるのです。

しかし日本の親にとっては、子どもに尽くしてあげること、それも他人から文句を言われないぐらいに尽くしてあげることが、子育ての目的です。子どもに樂をさせることが子どもに対する愛情だという感覚が身に付いているのです。そしてそれが親の生きがいになっているのです。つまり、子どもが世間的評価を得ることが生きがいであって、良いこと

とされています。世間的評価の基準は、偏差値の高い学校に行かせること、一流企業に就職させること、そして女性であれば一流企業に勤務している男性に嫁がせることであり、それらの基準自体が、親の生きがいとなり目標となったのではないのでしょうか。

私に言わせれば、自分の息子や娘をお坊ちゃんやお嬢さんに育てることに酔っているのが、パラサイト・シングル親だと思えます。もちろん子どもと同居している人が全員そうであると言っているのではないのです。しかし、そのような人が増えていることは確かだと思えます。

インタビューすると、親にしてみれば、自分はお坊ちゃんやお嬢さんではなかったのです。「30～40年前の自分は、それほど豊かでなく、兄弟が何人もいて自然に育ったが、近所にはピアノを習っているお嬢さんがいた、そしてお嬢さん学校に進学し短大を卒業して、収入の高い、すごくいい男性と結婚していい生活をしている」と言うのです。そして、今の私なら、私の息子や娘をお坊ちゃんやお嬢さんに育てることは可能だろうと思って、一生懸命やったのです。でも無理です、みなそうやって育ててしまったのです。お坊ちゃんやお嬢さんを育てるのはいいのですが、その結婚相手がいなくなったのが今の時代です。

愛情表現と社会観

実は、私は家族の中の愛情の研究を長年やっております。それで、欧米と日本の愛情観が違うのではないかと思いました。欧米では、愛情は「自立した者同士が、何かしらのコミュニケーションをすることによって、確かめるものである」と思う人が多いのです。しかし、日本ではお金やものやサービスで表します。つまり「何々してあげる」ことが愛情であり、逆に、「何々しなければ愛情がない」と言われてしまうのです。そのような愛情観が戦後確立されたのではないのでしょうか。

ある政治家が「嫁が姑や高齢者の面倒を見るのが愛情だ」などと発言しました。面倒を見てあげることが愛情であれば、面倒を見てあげなかったら愛情がないのでしょうか。断じてそうではないのです。つまりそのような「何々してあげるのが愛情だ」ということに代表される日本の愛情観に、今、相当ゆがみが来ていると思えます。その最大のものがパラサイト・シングルだと思っています。

確かに難しいことです。例えば大学の学費に関して私の友人にしみじみ言われました。「山田くんの言っていることは分かる。それはもちろん、アメリカのように、自力で大学の学費を調達できるようにする、親は出さなくてもいいようにするのが理想だというのは分かるけれども、他の親が大学の授業料を全部出してあげているときに、自分の子だけが自立しろというのはやはり酷だろう」。つまり「何々しなければ愛情がないのではないかと思われる」という世間の目にさらされながら子どもを育てているのです。

だから、子どもが親にねだる最大の方法は、昔から変わらず「何々ちゃんも持っている」と言うことであり、成人してもその方法は有効なのです。最近では地方では、「地元の大学に行けば仕送りしなくていいのだから車を買ってやる」と言って一軒が始めると、もう隣の家もやらざるを得なくなってみなそうになってしまう、そのような構造になっているのです。

このような例がありました。先日、私の卒業生で結婚しているカップルが私のところに来て「そろそろマンションが安くなっているんで買いに行こうと思っ

んですよ」と言うのです。「私たち頭金があまりないんですけども」とマンションの販売の担当者に話したところ、「最近の若い人たちはそれぞれの親御さんから500万円ぐらいずつ出してもらって頭金にするのが普通みたいなんですよ」などと言われてすごすご帰ってきたのだそうです。それが普通なのでしょう。

1人の子どもを育てることは小さいころだけ育てればいいのかではなく、大学に行かせなければ愛情がない、そして30～40歳になった息子や娘のマンションの頭金を出さなければ愛情がないと思われるとしたら、親は大変だと思うのです。戦後の日本社会においては、楽をさせることがいいことであるという価値観が広まってしまった気がします。

では、欧米はどうでしょうか。まず、授業料は払いません。払う親もいますが、アメリカの高校生が大学に行く場合は、高校時代からアルバイト代を貯めて奨学金をもらって、自力で大学に行くのです。もし足りなかったら親に借りてというかたちも、もちろんありますが。

それではアメリカの親は冷たいのでしょうか。そんなことはありません。身体接触調査をしたことがあるのですが、親子で抱き合ったりしますかと聞くとアメリカでは別々に住んでいても、授業料を出さなくても、たまに帰ってきたら、父・息子であろうが、母・息子であろうが、父・娘であろうが、抱き合ってキスします。それが愛情表現なのです。

更にアメリカでは、調査などで明らかなのですが、親子間で一緒に家事をしたり、ボランティア活動をしたり、ともかく一緒に何かをすることによって親子の愛情はつながっているのであって、何々してあげる、あげないで愛情があつたりなかったりするものではない、という意識が強いのです。しかし日本では、「何々してあげなければ愛情がない」と言われるかもしれない、と考えてしまいます。つまり、ものやサービスを離れたコミュニケーションがないのかもしれない。

高齢者介護の問題でも一緒だと思います。「何々しなければ愛情がない」と思っているのが日本であれば、欧米では「介護と愛情は別のも」としてやっているのです。介護は必要があるからやることであり、コミュニケーションや心の交流が愛情を作り出す、だから、お金の関係がなくても、決して親子関係が崩れているのではないのです。

また社会観も違う気がします。欧米でも、例えばパラサイト・シングル的な立場にいる人はいます。アメリカでも、上位5%ぐらいの年収何千万円という人々は、子どもにお金をかけていい大学に入学させようとしています。でも、そのような人たちは必ず子どもに「ボランティア活動をしろ」と言うのです。つまり、「恵まれた者はその恵みを社会に還元する義務がある、自分は豊かな親のもとに生まれて恵まれている、だからその分、社会奉仕活動をしなればいけない」というかたちで、アメリカやヨーロッパの社会奉仕活動は発展したのです。いわゆるノーブレスオブリージュ、高貴な者の義務というかたちで代々受け継がれているのです。

日本でも、高貴なところではそのような教育をしている例ももちろんありますが、最近では1千万人のお坊ちゃん・お嬢さんが育ってしまいましたから、「これが高貴だ」というわけにはいきません。となると、自分たちの家族が良ければそれでいいとなるのも当然かもしれません。

日本の家族の在り方、その歴史的変遷

では、歴史的にはどうだったのでしょうか。やはり戦後の日本の家族の在り方は、「夫は仕事、妻は家事で、豊かな家族生活と子どもをより良く育てることが家族の目的である」と思って、一生懸命働いて子どもにいい生活をさせることを自己目的化したのではないのでしょうか。だから、高度成長期ぐらいまではうまくいっていたのだと思います。

しかし、今から25年ぐらい前、高度成長期が終わるころになると、それが行き詰まりました。では、その豊かになった次に何を家族ですればいいのか、そのようなところをあまり考えずに、「より豊かな生活を」と思っているうちにパラサイト的な生活に行き着いたのです。

今度は親でなく、なぜパラサイト・シングルが家を出たり結婚したりしないのか、そちらの要因を少しお話ししたいと思います。パラサイト状況を作り出した社会的な状況をお話ししたいと思います。

私もかかっていますが、最近、「結婚や子育てに夢を」が厚生省や総理府の少子化対策のキャッチフレーズになっています。そこで、希望や夢とは何かを考えてみました。夢のような生活をするのが夢なのだろうかと思い始めて、いろいろ文献調査をしてみると、ランドルフ・ネッセという人の論文に出会いました。そこで「希望というものは努力が報われる見通しがあるときに生じる。逆に努力をしてもしなくても同じと思ったら人間は絶望感を持つものだ」という命題に納得しました。つまり、その人の状況が豊かかどうかは、希望とはあまり関係がないのです。自分の努力が報われる、報われるということは人から認められることとほとんど同じだと思うのですが、他人から認められる見通しや期待があれば、人間は夢が持てるのではないのでしょうか。

戦後直後の日本はそのような夢が持てたのです。経済的に豊かな生活、将来楽な生活をするために、勤勉・節約に努力することができて、それが実際に報われてきたのです。

それは欧米も似たようなものであったらしいのです。価値観を研究している知人が何人かいて、聞いてみると、ドイツでも戦後しばらくは勤勉・節約型の価値観がずっと続いていたのだそうです。

しかし、欧米では1970年ごろから脱物質主義的価値観に変化してきたそうです。つまり経済的な豊かさではなく、自立をすることや、価値、個性、いろいろなライフスタイルを取ることが称賛される価値観が広がってきました。しかし、日本では逆に消費物質主義価値観が、これを外国の研究者は「ヘドイズム」と名付けていましたが、1980年代、いわゆるバブルを境に急速に広がりました。他人に認められることはブランドものを持つことである、という価値観になってきたのです。

どのようなものを消費するのかによって他人から認められる、どのような家に住んでいる、どのような洋服を着ている、そのようなことが特に若者の間では重要視されるようになっていきました。自分が何をやっているのか、どのようなものを目指しているのかということは、若い人同士ではあまり関心を持たれなくなりました。どのような服を着ているのかが、人に威張ること、専門用語で言うところの「商品欲求を満たす」ことになってしまったのです。

そうしますと、日本社会は、とにかく依存して楽をしていい消費をしていたほうが得と

なります。逆に、まじめにこつこつやってもだれも見えてくれないとってしまうことに、このような状況ができた側面があるのではないのでしょうか。

価値観の研究者は「勤勉・節約型の親から享乐的な子どもが育ったのは最大のパラドックスである」と言います。私もそう思います。日本の親自身に生きがいやコミュニケーションの楽しさがないし、自分の苦労は無駄だと思っているのではないのでしょうか。先ほど話しましたように「自分は不本意な結婚をした、自分はもっと勉強したかった」となれば、欧米であれば、「結婚し直せばどうか、勉強し直せばどうか」となります。自分がこのようなつらい経験をしたのなら自分が豊かになったときには、次に自分で何をするのか決めればいいのですが、それをしないで子どもに楽をさせる方向に向かってしまいました。今の50代、60代の親の自己矛盾・自己否定的なところが、パラサイト・シングルという享乐的な子どもを作り出したのではないかと私は思っています。

パラサイト・シングルが与える社会的影響

では、今後どうなっていくのでしょうか。もう最後10分ぐらいになりましたが、話を続けさせていただきます。

私はパラサイト・シングルを少子化の原因の最大のものだと思っています。しかし、私が心配しているのは少子化という問題よりも、いわゆる社会意識的な効果です。

多分、パラサイト・シングル状況は若者のやる気をなくす、先ほどの言い方をすれば、「若者から希望を奪っている」のではないのでしょうか。「何でも好きなことができるから希望がないなんておかしいではないか」と思うかもしれません。しかし、楽をしていい生活をしていることと、希望にあふれた生活をしていることは、多分違うのだと思います。

努力が報われる見通しがときに希望を生じるとすれば、パラサイト・シングル状況の、親がリッチで何でもしてくれる若者は、あまり努力しなくても楽でリッチな生活が楽しめます。逆に親が利用できない、一人暮らしをしていたり、若くして結婚して親の援助がなかったり、親がそれほど豊かでない若者は、いくら頑張っても苦勞してもぎりぎりの生活しかできません。それが同じ25歳くらいの人たちの間で起こっているのです。

今日本の階層分化について話をしますが、同じ25歳で、一方は子どもを育てながら髪を振り乱して働いている人がいます。一方で親に全部家事をしてもらって、「今日はパリだ。明日はエジプトだ」と言っている人がいます。「それではやる気は起きないだろう、やっぱり」と私は思うのです。だから今楽しんでおく、努力してもしかたがないのだから今楽しんでおくという消費・享樂主義が、徐々に広がりつつあるのではないのでしょうか。

だからなのではないでしょうか、パラサイト・シングルの人は、自分の稼ぎ以上の生活をしていることに自覚がないのだと思います。話を聞くと、「自分で稼いでいるお金を自由に使ってなぜ悪い」と本当に言われるのです。匿名の投書がばんばん来るのです。その中に「親が豊かな者の子どもが豊かで楽なのは当たり前だろう。子どもが貧しくて、親が貧しい人は、一生懸命努力したって貧しいのだからそんなの当然だ。こんなパラサイト・シングルなんて書くのは、おまえの親が貧しかったせいだろう」というものがありました(笑)。

パラサイト・シングル現象を話題にすることは貧しい者のやっかみにほかならないという社会意識が作られ始めたら、社会は衰退していくか革命が起きるかどちらかですが、革

命というエネルギーもないでしょうから、多分このような社会は希望を失って衰退していくのだと思います。

パラサイト・シングルの子供も暗いかもしれません。親元ですっと気持ち良く暮らし、親が尽くしてくれて、自立する苦勞も全部引き受けてくれることが当然だと思っている、自立能力のない若者が、20歳、30歳となってくるのです。

彼らは何を考えているのでしょうか。女性も男性も結婚できるはずだと思っているのです。私は「パラサイト・シングルの不良債権化」と言っているのですが、その話をしたときに「だれの不良債権なんですか」と聞かれました。親の不良債権なのか、パラサイト・シングル本人のことなのか、分からないのです。

女性は、収入が高くて、家事を手伝ってくれて、顔が良くて、浮気しない人と結婚できると信じているのです。私が授業の中で「そんな人いないよ。だって収入の高い人は大体忙しいし、フリーターはそれは家事手伝ってくれるかもしれないけど収入低いよ」と言うと、「いや先生、社会学って確率論なのですよ。そういう人いますよね」と、ある女子大生は言うのです。「収入が高くて家事手伝ってくれてハンサムで、そんな人って浮気しないわけじゃない」「周りがほっとかないよ」と私は言うのですが、「でもいますよね」と。そこで私が「いや、いるかもしんないけど、そういう徳のある人というのは徳のある人同士で付き合い合っただけで、あんたみたいな人は選ばないよ」と言うと、その女子大生は「えっ」という顔をするのです(笑)。

また、結婚できなかったらどうしますかと聞くと、返答に詰まってしまうのです。私は、親元同居の未婚が全部悪いとは思いません。最初から親元同居の未婚でいくのだと決めて、生活設計をして、親が弱ったときには家も建て替えなければならぬからこうして、キャリアも付けて、という計画的な親元同居の未婚であったら、私は何も心配しないのです。

しかし、親元同居の未婚者の大部分は、夢みたいな結婚を夢見て、結婚できなかったことを考えません。いや、結婚しても、離婚経験率は3割ですから、これから結婚しても3割は離婚すると推計されます。そのような中で、結婚すれば安心だともいえないのです。つまりどのような場合でも対応できる能力を、男性であろうが女性であろうが、身に付けておかななくてはいけない時代になっているのです。

また、結婚しない人、できない人は今の20歳で約2割だといわれています。結婚したとしても離婚する人は3割ですから、大体今まで通りの人生を送る人は実は2人に1人もいるのです。私はリスクとギャンブルは違うと思っています。だから、どのような場合でも大丈夫な生活設計、「こうだった場合はこうなる、こうならなかった場合はこうなる」ということをきちんと計算できて対応できるのが多分リスク管理なのだと思います。でも、今の若い人の中ではギャンブルです。結婚できたらいいが、できなかったときのことは考えない人が増えているのではないのでしょうか。

若者の努力が報われる社会を

救いはあるのでしょうか。やはりインタビューですが、「楽だけでも物足りない」と言うのです。「私は、本当に、海外旅行で行きたいところは全部行った。でも行けば行くほど物足りなくなる。ボーナス50万円全部使えるから、それであこがれのバッグを買った。だが

買った瞬間に物足りなくなる」と言うのです。楽だが物足りない生活なのです。わくわくドキドキしないのです。親が全部安全に囲っていますから、リスクなしに今のところは生活しています。「できれば時間が止まればいいと思っています。だけれども何か物足りない」と言うのです。それを苦勞はあるがやりがいのある生活に何とか持っていけないでしょうか。

やはり人間は、多分私も含めて、パラサイト状況であればそのままどっぷりと漬かってしまうと思います。楽だが物足りない人生と、苦勞はあるがやりがいのある生活を二つ、目の前に提示されたとすれば、やはり楽なほうを人間は選んでしまうのです。だから、あながちパラサイト・シングルだけを責められないのです。苦勞すれば、楽しい充実した生活が待っているかもしれません。しかし、先に苦勞するのはいやなのが人間だと思うのです。

それではどうしたらよいのでしょうか。パラサイト状況への対策は、若者の努力が報われる社会を作り上げていくことしかないと思います。

今の日本社会は努力しても報われない、特に若者にとって、一生懸命努力しても報われないのではないのでしょうか。若い女性は、「いくらこのまま一生懸命仕事をして、どうせ……」と思いだすと、「じゃあ、親と同居してるし楽しんじやったほうがいいわ」となるのかもしれない。男性も同様です。かつては年功序列でしたが、「おれのときからなくなるかもしれない。それでは、親と同居して車でも乗り回して楽しんでるほうがいいや」と思う若者が、増えてもおかしくないと思います。

つまり日本社会の若者にとって、努力が報われる社会になってくれば自然とパラサイト・シングルはなくなって、苦勞はあるがわくわくした生活に飛び込めるようになるのではないのでしょうか。そのような社会を作り出さなくてはいけないと思うのですが、なかなか現実になると大変かもしれないと思っております。

少々時間を超過しました。基調講演などとおおげさなものではないのですが、話はこれで終えたいと思います。どうもありがとうございました(拍手)。

基調講演資料

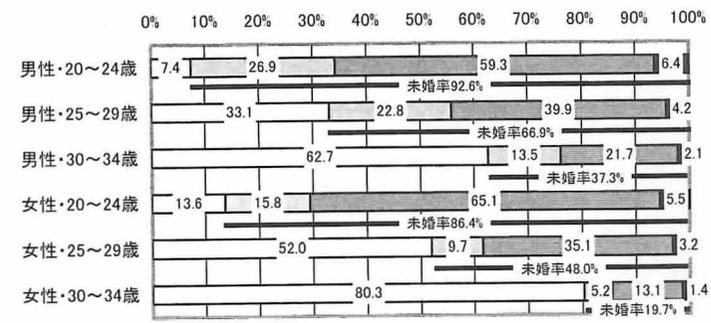
図表1
出生児数

各回調査における完結出生児数
(結婚維持期間 15~19年)

調査年次	平均出生児数
第1回調査(1940年)	4.27(人)
第2回調査(1952年)	3.50
第3回調査(1957年)	3.60
第4回調査(1962年)	2.83
第5回調査(1967年)	2.65
第6回調査(1972年)	2.20
第7回調査(1977年)	2.19
第8回調査(1982年)	2.23
第9回調査(1987年)	2.19
第10回調査(1992年)	2.21
第11回調査(1997年)	2.21

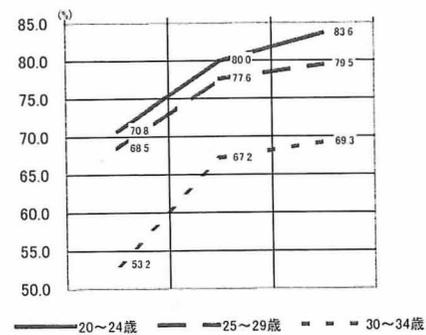
注:各回調査とも初婚同士の夫婦を対象とする
資料:厚生省人口問題研究所「平成11年日本人の結婚と出産」より

図表2
若者の結婚、居住形態



注:国政調査(1995年調査)より作成
□既婚 □同居 □親同居 ■その他

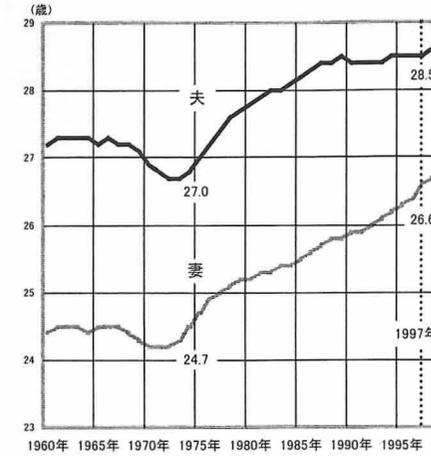
図表3
働く未婚女性の親同居率



資料:厚生大臣官房統計情報部「国民生活基礎調査」より作成
平成10年版厚生白書

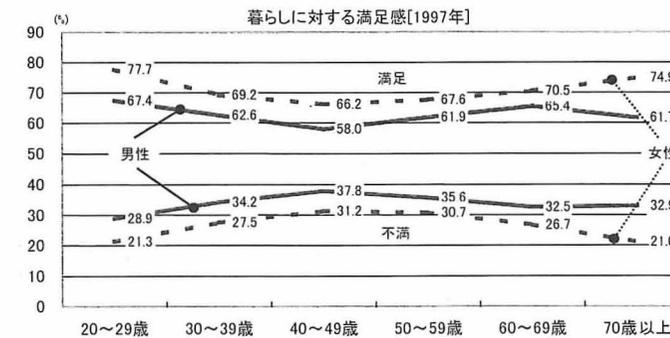
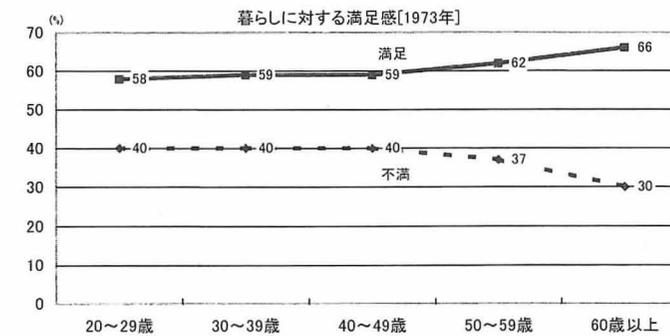
図表4
平均初婚年齢

「人口動態統計」による平均初婚年齢、
および平均夫婦年齢差の推移



図表5
豊かな20歳代

生活満足感が最も高いのは、20歳代女性(パラサイト・シングルが多いから)



資料:「月刊世論調査」(昭和50年9月号、平成10年3月号)